今井氏
文鳴
備中藤井長門守考

別技書ノ
源氏色紙

別十五号

源氏物語乃繪

鴻
四
之

八景

乙女初ノ朝日暮雪　正初子五堂馬九競榊野々宮

玉葛晴風夕霧夕照　二花晏六夕月十紅葉賀

帚木夜雨須ノ秋月　三巻柱七篝火十一乙女

明石晩鏡松風帰帆　四葵八明石十二御幸

四季

春初子　夏夕顔

秋明石　冬紅葉賀

十二月

以下所々張紙ノ下

そのころこまうどのまいれるなかにふかくこきさうあんありけりを（相人し人の相とうて吉凶を云る麗人し）

きこしめしてゐのうちよめきむしうぶのみうどれはいまし（禁中し）（源氏し）

見つれえいミじうちのびてゐ源氏の姿見めきてめしつつうしし

ぢうろうぶちてつつうまつ承たい大辯の子れやうよ相人をせそ

源氏を誘引かし（侍し）

てまつる相人おとろうてあまくいたびくふさあやしふくみの

源氏をえまうしてくこくなくなと驚て不審したるさまし（道とうむ事あやしふし）

おやとし成て帝まれクミのきくくあるよの国ふべきれおります人の（下略）

此童形ハ則源氏光君　十一歳

付従ノ黒袍着シタル人ハ　右大辯

唐服ノ人ハ　高麗人也

則鴻臚館ニテ光君ノ觀相ノ図也　光君ト云各ハ高麗人のめてきこ（て付きるし）

御容チ美麗ニシテ玉の如きと称シテ光君と云トソ

八景

乙女初ノ朝ノ暮雪　正初子五蛍馬九榊野々宮

玉葛晴風夕霧夕照　二花晏六夕ノ月十紅葉賀

帚木夜雨須ノ秋月　三巻柱七箒火十乙女

明石晩鏡松風帰帆　四葵八明石十一御幸

四季

春初子　夏夕顔

秋明石　冬紅葉賀

十二月

以下所々張紙ノ下

今井氏　伝考

文鳴　考

備中藤井長門守考より

詞按書ハ源田宗右衛

八景

乙女初ノ朝ノ暮雪　正初子五蛍馬九榊野々宮

玉葛晴風夕霧夕照　二花晏六夕ノ十紅葉賀

帚木夜雨須ノ秋月　三巻柱七箒火十乙女

明石晩鏡松風帰帆　四葵八明石十御幸

四季

春初子　夏夕顔

秋明石　冬紅葉賀

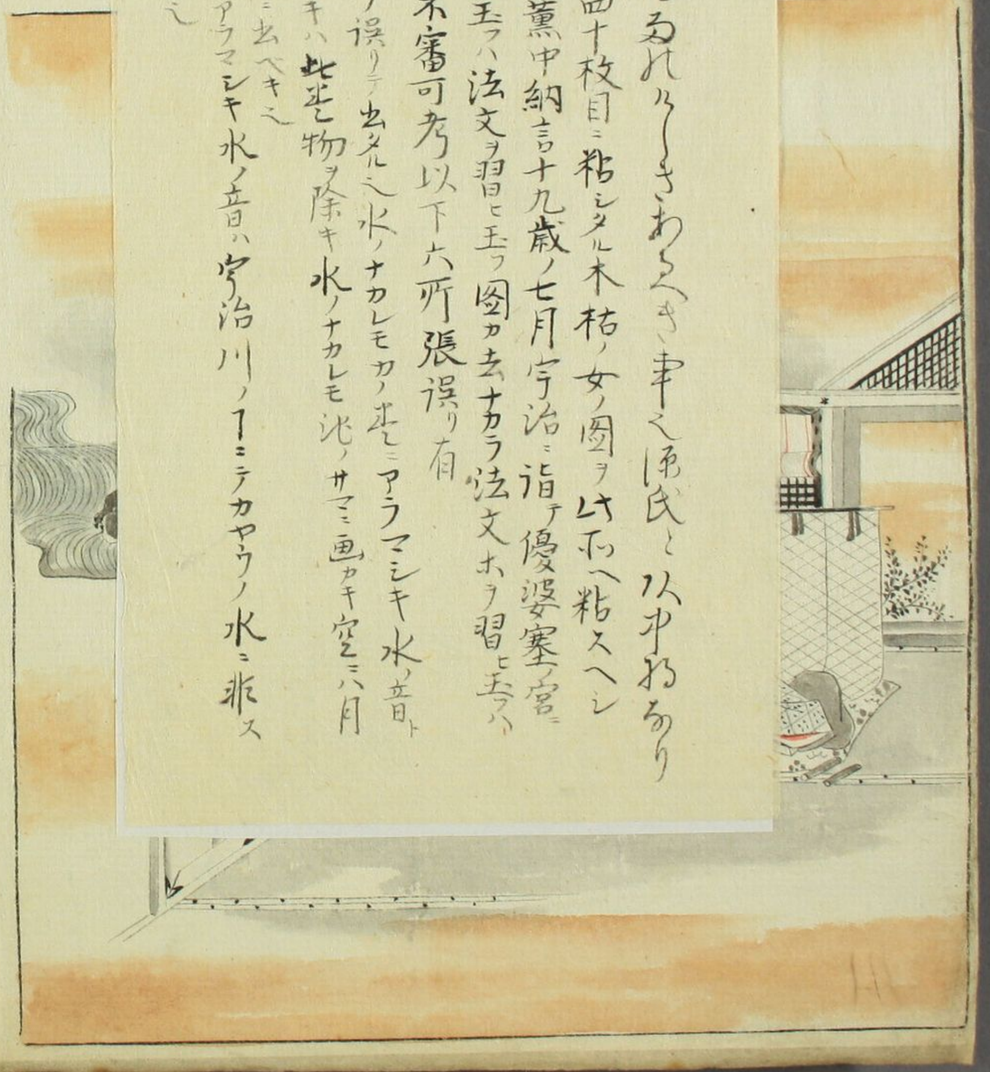
十二月

神奈月のころ四ひ月ばかりしら雪のうちつもりまさる夜はいとさむくて侍れば大納言の君よりとまりたまへと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちゑんやうのようひのみよ殿上人もなきくへもどくあるよりはとのゐ和も
れいはりハのどやうのうんちもそれ相金と云り　相思し
どこ結つめそよちろれ御簾子　相思しのふらちくて　源氏の心ハ
かきうるあり　　学文のえ
いでく中将わりあくゆかしくれ　えまホーさきの心あり　源氏中将よりもそれ　ふみどもをひき
やんとし　　ばさりぬくさもとこしいふせんろ
見るのべうもこそ　　頭片輪　　ばそのうちとけてくこうい
たしく相思うれむこそゆうしあれ

御説カルコトハ此絵橋姫ノ巻ヲ誤リテ出ダシタルナリ　ナカレモ
アルニヨレルニ　椎カ本ノ図トスルトキハ此巻物ヲ除キ水ノナカレモ沈ノサマニ画カキ空ニハ月
ヲカキ奥ノ方ニスラカケメルヤウニ出ベキニ
水ノナカレハイヅレニテモヒガコトニアラマシキ水ノ音ハ宇治川ノコトニテカヤウノ水ニ非ス
沈ハ宮ノ御殿ノ御庭ニアリシニ

此さうん反れくきこ系ものり迎しのさしきあ小君ハもれ口より入こ
源氏ハ宮ノ御ノそきあふこ
すたれのをきあふ入の思ひ入つる
るうしりてあざあふ見ることをしの
のるをしたやれをうれまきる屏風もをう
らけていとらく見入る火ばうし　ひきハりをてる屏風もをう　影ハれハ母やう
そハをる人やるこ沈ケるとすれめとこめるべハ　母屋の中ばうらに　宇治しつの考ニ居ハり
此初みてを極座敷ありてありれ月とる系ふ印ハ女人ハ彩帰の萩
みて沈ふむきて沈ハ沈の人うつせうの君し
うし有るうしのそきあふ系ものくし　くうしひとけ人などあも　わがてこ西まくしすもをあるうるつき
やせうとをていうこうひうくしこり　やせうとをていうこうひうくしこり
空蝉の弁ニふクう祇あり
ハ石六月ハより庭ニハギノ花ハ然ル可カラズ



えくきこの此へ

あらの名さへ名れ石れ名れ名れ名きあらき事へ氏と以中れあり

氏図第木巻下ハ思ロレズ奥ノ四十枚目ニ粘シタル木枯ノ女ノ図ヲ此ハ粘スヘシ

此図ハ四十六椎カ本ノ図ト入ヘシ薫中納言十九歳ノ七月宇治ニ詣テ優婆塞宮ニ

對面シ玉フ図ナルヘシ巻物ナト見玉フハ法文ヲ習ヒ玉フカ去ナカラ法文ハ習ヒ玉フハ

薫十六歳橋姫ノ巻ノ支ナリ不審可考以下六所張誤リ有

御説ナルヘシ此絵ハ橋姫ノ巻ヲ誤リテ出タルニ水ノナカレモカノ此ニアラマシキ水音ト

アルニヨレリ　椎カ本ノ図トスルトキハ此ニ物ヲ除キ水ノナカレモ沈ノサマニ画カキ空ニハ月

ヲカキ奥ノ方ニスヲカケタルヤウニ出ベキニ

水ノナカレハイヅレニテモヒガ下ニアラマシキ水ノ音ハ宇治川ノ下ニテカヤウノ水ニ非ス

況ハ宮ノ御殿ノ御庭ニアリシニ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

御嶽金峯山也

夕島の上ノ衣裳　紫のうもさもえしうつぎし

衣裳のいろあひの

白きあつもの　白きあつもの

精進

礼拝

今書山へ百日精進して参らふとそくし今時の役者参りなぐみれ

カラウス古キ形ナ知レズ昔ヨリフマズキヌ布ナト洗テフム者トソ

藤

コノ画キヤウワロシミタケサウシモカラウスモミナ隣ノ家ミノ丁ニテ是ハワラ屋ナドソ

ヨカラン又サウシオンナフ人ハ白髪ニカノベレコノミタケサウシハ夕顔ノ宿ノ内ト云カ、

御嶽ノ金峯山也

八月十五夜晩ちかくなりぬ竹さらし物をふ可竹さらし

詞ハ八月十五夜ハ中よりあき月ハ世間おかるるつるやなりなくきて名きて

濡ぬれ袖ぬれ袖ぬれ袖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕顔

源氏は瘧病にて本復ましまして
はむしの人々公達京中なる中弁なとあまた
苔のうへなとわそうしけまいるなり
もしなりの中納言ふしこうなりし
の君扇をうちなしてい
人々ハとなる君こちなるを源氏のさいこうちあやとうこふ
ようもあるまいるはくぐひのくゆ
めつるはじうり者例のひちりさ
せるとさあるのしなり侍所さうん
はひやうしあそそ
侍らんとせちにさうしの
ととさうたまくどげ
筆菓 さうの笛 笙 十三 篥ト云リ 又簫ト云ハ 廿三管 長一尺四寸 十六管 長一尺三寸

藤
此圖ミワロキニハアラチド紫ノ上ノ祖母君ト居玉フ所ヲ
小柴垣ノヒマヨリ源氏ノ君ノ見玉フ圖ノ此卷ノ主タル所
ナリケル

[illegible]の日おつるさ[illegible]どる（夫木抄の方へ）おつるとうとうこれさぶらふ（原の中納言のよりあきを云）
（命婦の局）
[illegible]（夫木抄の方へ）[illegible]（夫木抄の方へ）[illegible]（夫木抄の方へ）

本書 うゐ山ぶみ

源氏の中わ　女房　令妙

未摘花のさゑし

車もてる中門のいとこうゆゑこうろひてなめ目　あかくれてうくさ
りくれ　ゆかしりあくこうること　まるいうく　ゆくこうること　まるうり　きれ
乃こあくこうげよふりつめる山里のふちしてわ　表あるを　下略
こちごれの木れうゆもれしるゆ　絶　ゆ　ゆ　ゆ

（注皇五十の御賀云々）
未崔院の御賀ハ神無月の十日あるべきなりけるよ
ろこびさたびとなりきれば御賀の日
（禁中の御あるべき禁中の御法ハ人ぬいとすと
ぬ人ぬハ御法ハ人ぬいとすと云ふ）
（御賀の試楽云々）
りの試楽ハ二日も有つるのことまはさるんをあるべおろかなれど試楽
を御前にてせさせ給ふ源氏の中将ハ青海波をぞまひ給ふ
（中将ハもとよりきこえてハなけきも深き立ちまいり人
ひてし）
ハ大とのゝ頭中将ハ
（常盤本のやうにみ給ふと云ふ）
ゝ
ゝれ深山木なりへるこの日ゝげさやうみさしるふるぐくの声ゆき
（舞のあ）
ゝ
ゝ
（御賀の試楽調楽なしてせさ給ふて舞楽のんゝもゝけ時の試楽
門裏ゝてせさ給ふて舞賀の女御ゝんセたてまつゝセ給ふ）

舞装束　青色袍　表袴　文小　葵
大海賦半臂也　蒲萄染下襲　面大海賦
裏蒲萄

花のえん

今花のえん小春学特れ華のもありとゝも禁中ち殿の

花宴ち

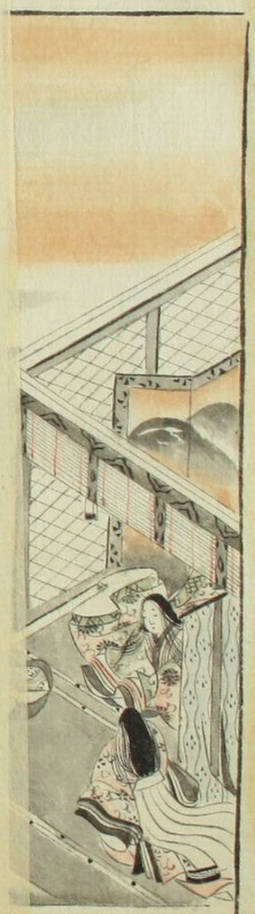
二月廿余日南殿桜宴ち　源氏の宰相中将華玄学博士、中将華柳花苑

其夜旅弘徽殿　太大臣、六君ち安通ち　六ち、朧月夜内侍のかみとし

扇を取替ちもあり

二月廿余日二条太大臣ら後朝　菊花宴ち　其日源氏の君布袴を着して

二条の君に向ひ給ふ如て扇のえを知ちふ　太大臣の六君とち



今あふひ車あゝそれの投りん

牛うけし車ハ源氏紫のうへし

日車くるあさおーまるくく人ち

源内侍のすけく　ひとゝあひのりてきぐれ

をだよりけ給そなとんや

まゝそふ人ちなり

中宮日也賀茂祭尺ふ給ふ今日ハ源氏も

女車ちそ給ふへさし

源内侍扇とさしいでく人とまるさしそて　略

ふ扇のけ給ひて桂殿の端を打ちゐ給

ちうなりゝ人のうぎきあふひ也神ちとう

ちふを行者ちとて京ちとうちふ

此源内侍ハ紅葉賀ち　年ハ廿ちとて　源氏ちん式ち又ハ中将も

ちをうけしへし　源氏ハ中将ちとし

源内ハ　ちとて十余ちし

ちとちとうちとけて物ちひちきそい　えちぬ二十の弱人ちとちとは中そ

花のゑん

今

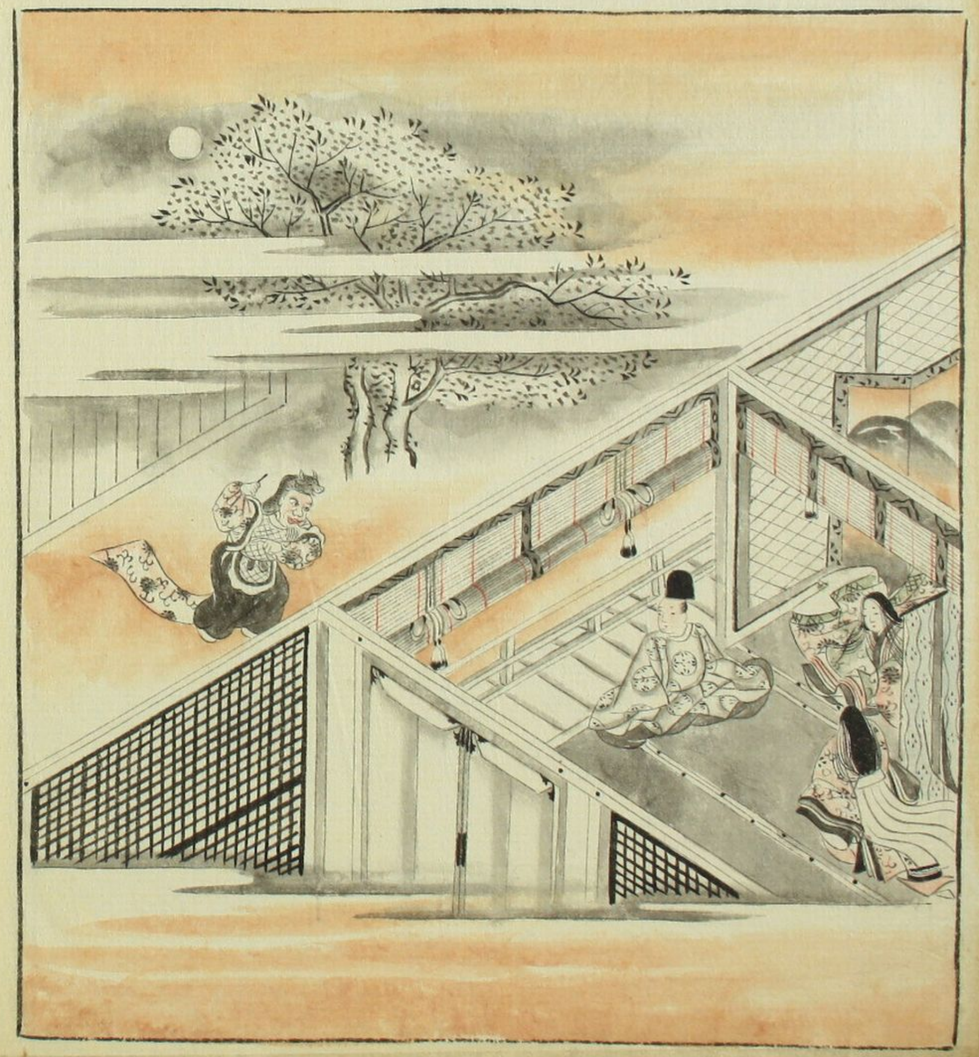
花のゑん小春学ばれ華のゆゑありとゝゝを禁中方殿の
車なり烏帽子直衣の人ゝゝゑん此ゆゑふかゝゝ

山図四十ノ御法ノ巻三月十余日紫上病中千部法華経供養ノ時陵王ノ舞
アル図ナルヘシ去十カラ孫生ノ十日中暑ホノ〳〵ト明行ノ朝ホラケ云ヽ有テ舞ヌ
アレハ月ハ無用九月モ満月ニアラズ山図ヲ四十枚目ニ粘ヒ山所ヘハ奥三十三ニ粘ヒタル
花ノ宴ノ図ヲ粘スヘシ

あふひ

中酉日也賀茂祭尺ふおはふ今日ハ源氏も
女車ゝそおはふへきし
源内侍殿とさしいでゝ人とまるゝさしゝそて略
りあう殿のいまゝ紙ゆりて格殿の源をわらはや
そなたゝゝやゝのうぎをるあふひ也ゝ神乃ゝ
乃ふを行者ゝと申て源氏の車へつゝわしゝゝ

花のえん



あふひ

八ノ
四ノ宮の巻
簾内ニ入ル源氏
源氏方ヘ神ヘ参ラントス入ル
文
神ノ巻ニ九月七八日比ノ夜月ハ○ノ形ハ
宜シカラス△形カ可考
簾
月ノ形御説ノ如シ

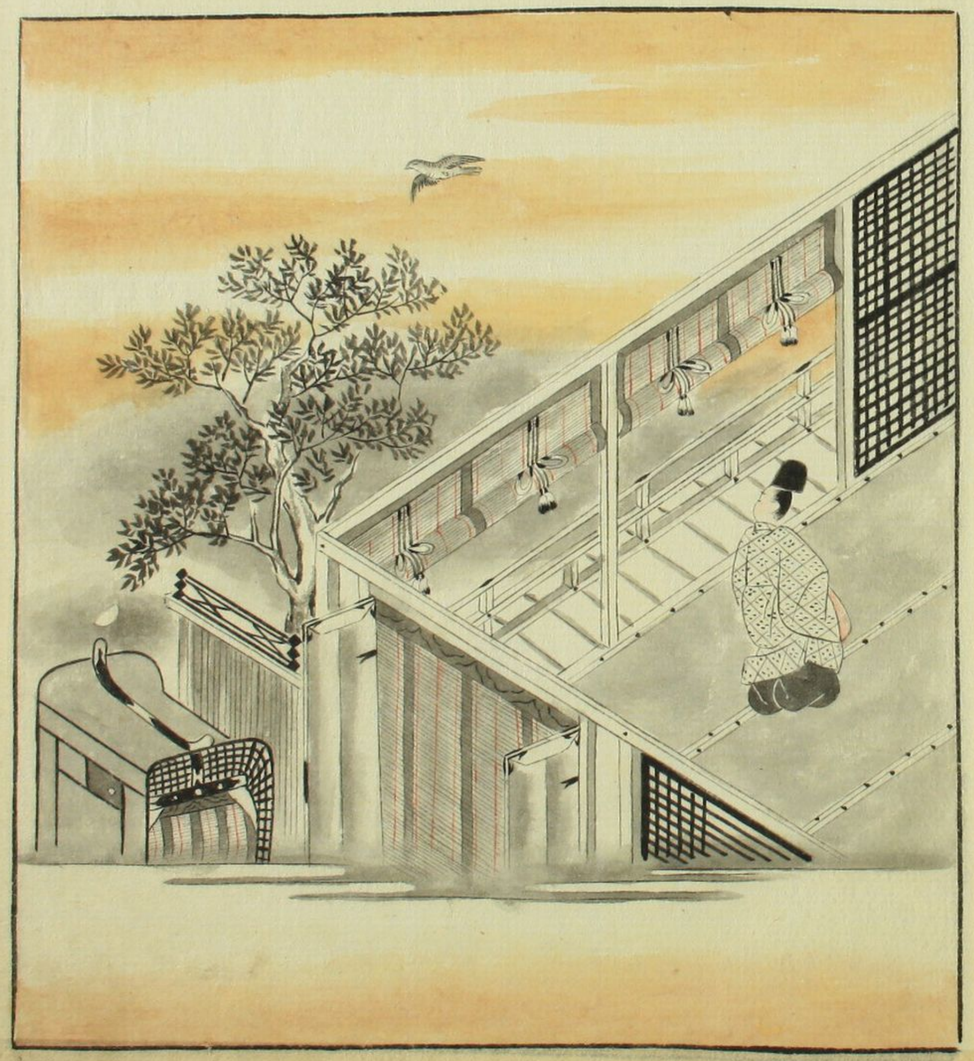
源氏 出ル不久しき中絶なれハ
さう木伐いさこの初りて出簾の内へさし
入てうちとけ給ふ
出ル不 神ろさけさろしのそぶもなろ
ぶをいろまぶて初れろさうろぞ

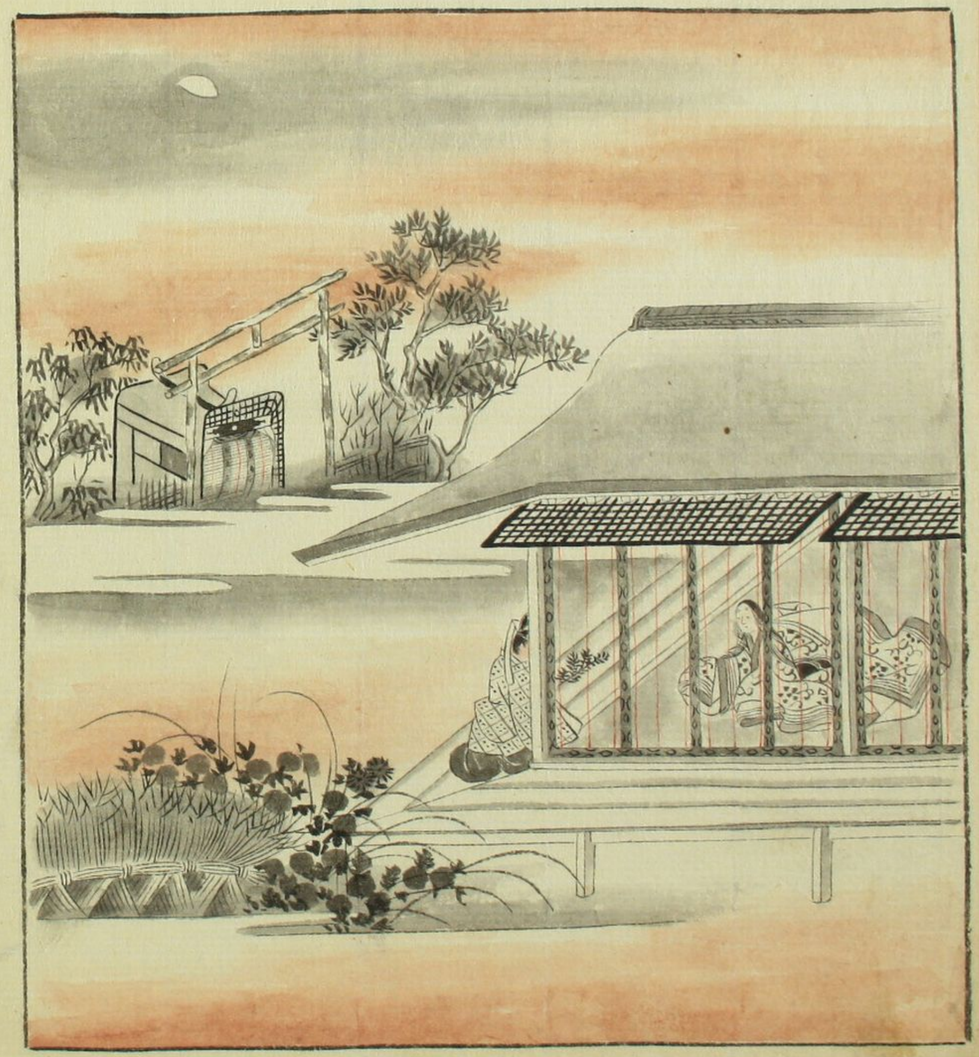
十一
花ちる里

簾景殿し 則源氏条りて
女御の御ろそむりれ御初ろりなどこさらしなよ花ふ京り花日
忘月さいづるほどよりぐ木ぐうさ
うきさろうるのろりなり月かしくろ
むりのろさつれねばされうちろ
ろ源氏ろりろのしろ花のろ
ろ女御ろして八花院の御代のろ
ろつりしくろろろ

女御ハ桐壺ノ帝ノ
女御ヲ画テヨロシカラニウ
月モ有テヨカラニカ

十一
花ちる里





十二
すま

すまのうらさ
あるこゝハ源氏の君
宮ハ此中納
言のうらさあるこ

信馬ともちゝこゝてゝ
ねどもとり
とてふるどもつゝゝみ給
此中納ハ催馬楽あもとうあもとうこゝて月
ゝのはなはなゝしゝ給
信馬共よ第ゝふまにゝうてみまくは
もゝゝとうゝゝふく

十三
明石

三月十三日須ゝより明石入ゝのむゝの
舟ゝ入ゝの濱ゝ館ゝ入給ふ

八月十三夜入ゝの濱ゝ館とゝゝ明石の
注給ふ異国の家ゝ元ゝ有ふ 姫君ゝ
さゝゝゝゝ 市車ハふゝゝつくりゝれど
月の花やうふさゝゝゝたるゝり
此ゝハ此ゝゝゝり

十二
すま

十三
ゐな

みをつくし

今 行末たゝかの御ふてゝ中たるゝハ道すがら

文 童随身ハ十人より是ハ畧ト見へタリ

位ある人ハ車あり 源氏ハ車あり ここハ神前あれハ

六位の中にも殿人ハ青色を著 車より下りあふ

なるあり 麹塵の袍を云より

良清も少将の位にありて

五位なれハ緋の衣をきたるし

ゝをゝ

今 卯月ハうの花ちる里をとゝ云ゝしつゝてなれハ

ゝりしてハあるゝ中くゝ忘不しあるし

文 常陸の古宮し

家居大に敗壞シテ至極荒レタル体に有へキ

松藤ハ外方より見ユル方に有ゝ

つゝてゝ来給とゝ云ゝあり

源氏ハ車より下りあふハ敬ゝの

礼を恠光ゝ馬のもちゝて

ひつゝこれをまつるゝ

のすゝ云ゝゝそ白らめゝ

恠光ゝあり 弱キ なるたゝりあるし

十四
みそつくり

十五
しそをれ

関屋

相坂関なり　伊与のすけ常陸ちよりかへりのぼりさこもいざるゑれまうり源氏源ゑ京まとりすこなて又の年の秋そひきちハのぞ
と考り関なる源氏石山まゐ籠そてうゝ法師
常陸ちうちあのそ侍ゑなるまとる源氏ハあそ
ゝ
ゝ
ゝ

十七
点合

十六
開屋

松を

源氏より中納言の迎ひの人々こしらへなりて中納言尼君
姫君をもしまりてともふのりのふ乗ぶ舟にて
思ひやふとさてこえたり辰の時ゆ舟おしはふ漕ぐれ
ぬもあの舟を入道殿のおりあて相ゆ乗くるとて悲ふ
兼てこそ思ひしの大井の家ふ思しのふしたふ尼君れ
祖父中務の宮とさこそふ嘆しのひ給ふ大井川の
ほとりふありけるが年ごろ訪れそこふ伝思ひいてく
修理亮をしそはわよ伝ふとそ雄義殿とも也

うと雲

けふは大井の家ありの中納言母君姫君法を伝ふよ
ちをひもありぬ書あつれ給ちよ人用そさもさりて
あやしくさふふ相母もよべう給ふれ給れとうちな
けさてつ給ふりとこの君をあでつくろひて
さ書をもけ給ふ源氏の姫君を中納言
なくて源氏の車よのくるといそき給ひのそ
あてやかなる人ばりにたりあまうやの物とりての
人々もの女房ものの車より
よ給へ給

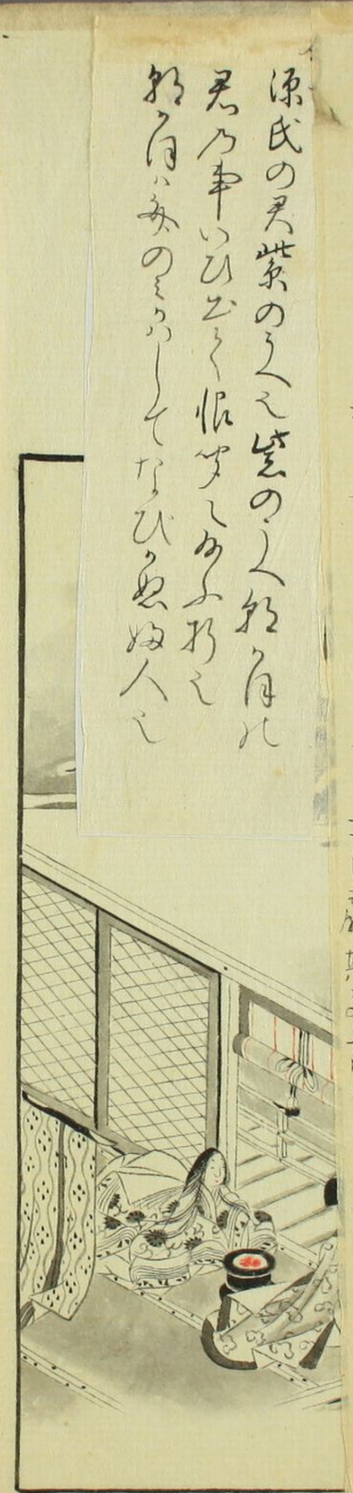
「ひとは中納言の姫君を三年二条院へ引き出るとあるとおりひとを源氏の中納言ふとおろと友あれでなり」

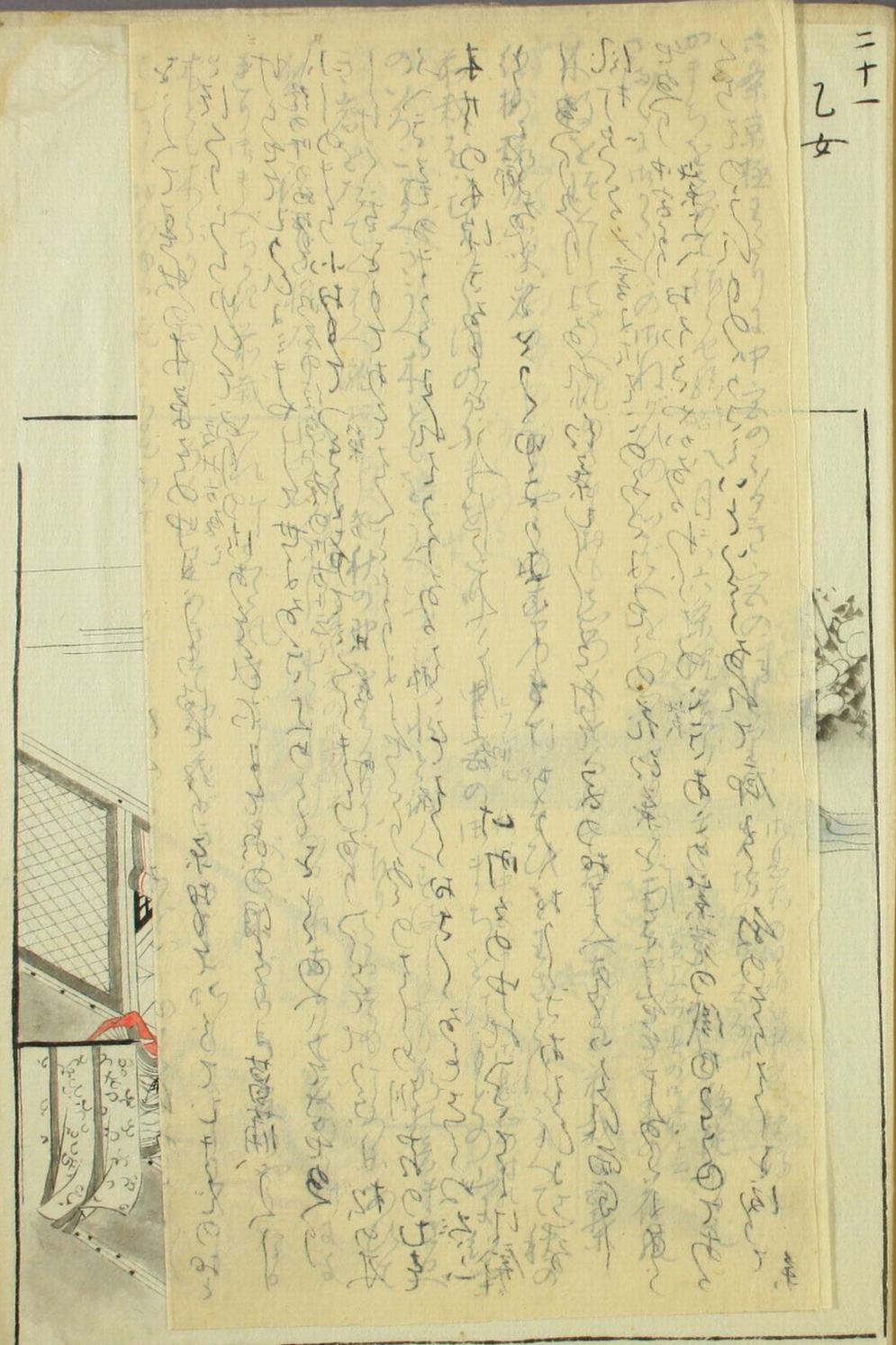
十八
松を

十九
うを宣

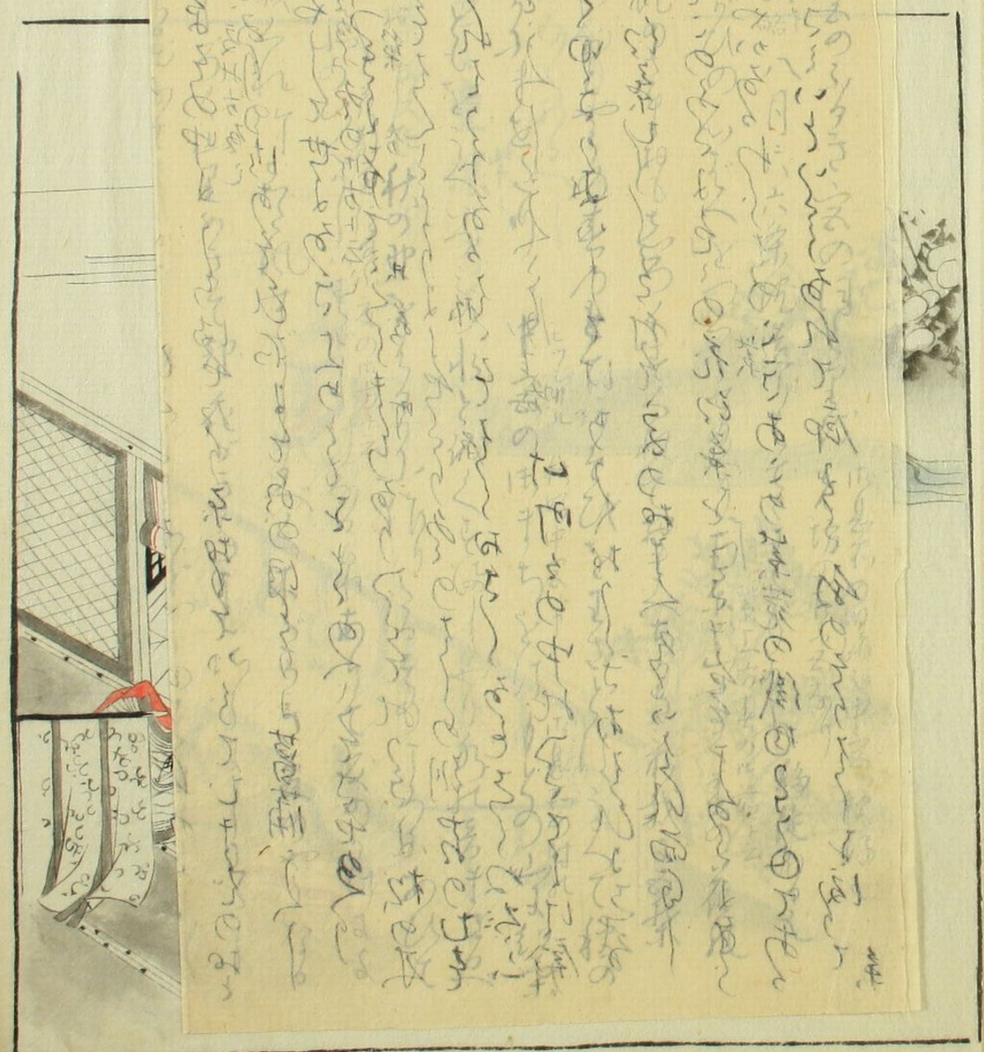
三条院なり　その東乃もとある月小雪のふりあひくらゐ空こそあやとゝ
きるなるさわの月ゝとそさ世の外乃しまで略　月きくゆるゆくさゝ
いろよゝえゝるゝされゝるゝゝ月れゝる前栽のうげこころぐゝうやゝあも
ゝとゝゝゝもをひて池の氷も元もいをびをごさよゝくゝおろゝて香まろばし
きさせおろゝげあるすぐゝゝらつきども月よゝくておかきやゝるゝれゝるゝ海
ゝのわこめらゝれうさおひしどけあるきゝものわもぐゝるゆめいゝるゝよこゝるゝ
あゝれふゝゝろもをもゝろゝ月よハまゝてもてをやゝゝるいゝとけさやゝるゝり
ちいさきハゝゝゝゝけゝゝゝろこひをゝふゝあふゝるゝもおとゝゝてゝうゝとけ
ゝかおゝけゝり　女の扇をもたすゝるゝとハ西をかくさんゝゝゝなりゝれゝ扇なゝとゝ

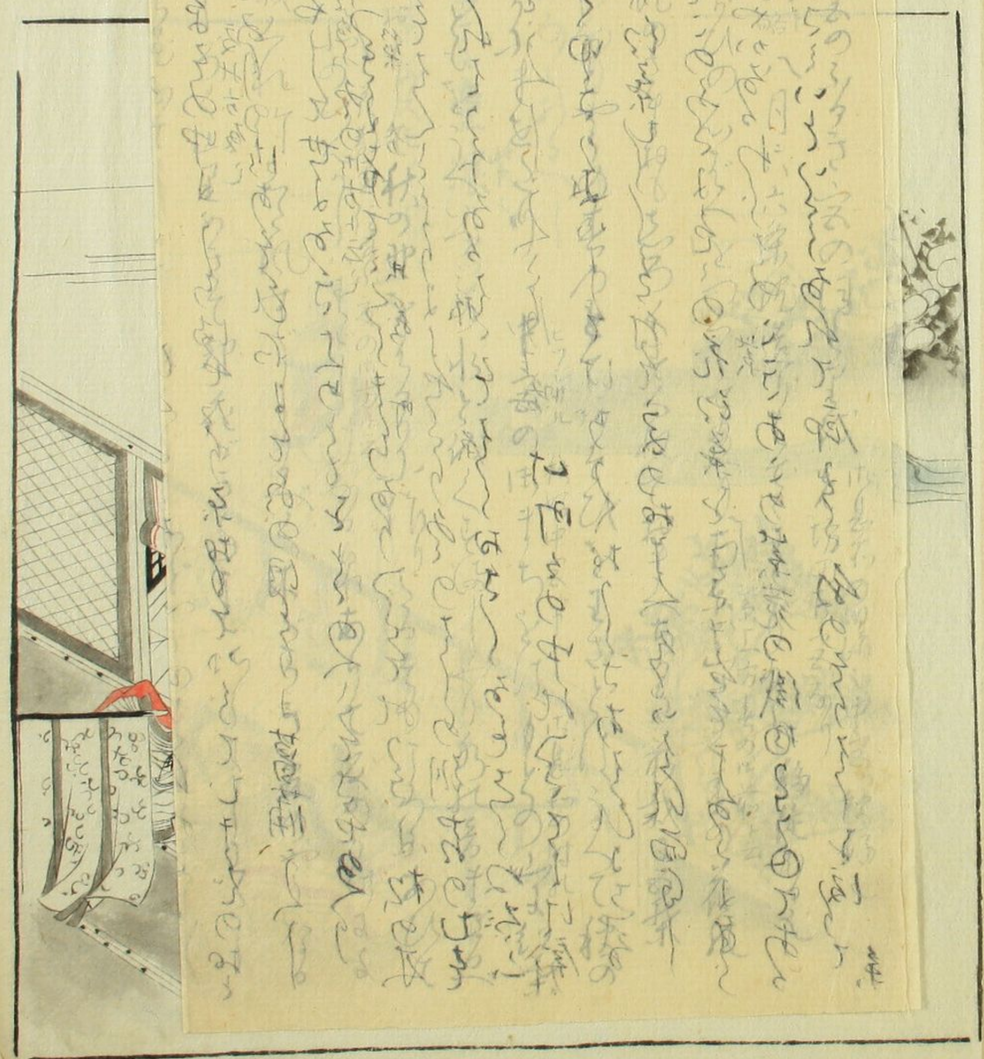
源氏の君紫のうへと笠のうへ紅葉し
君乃車いひゝくゝ低ゝしゝゝふれゝ
紅葉ハ女のゝゝふゝしゝてなびゝ恋ぬ人ゝ





今源氏の君紫のうへと笠のうへ給ひ
君乃申いひとゝ恨ゆゝしかりし
給ひ人のゆゝしてなひ思ぬ人と





六条京極まうりは中宮のふるさと宮のほとりなれば（作者の母方の祖父中宮の祖父秋好の父方の伯父なり）さぞ方（略）八月六条院渡りもてはやしきこえたり（紫上方春の庭前の云）物徒あるべき
さまざまに出でたちしのびねびのんどをつくしたるかの紫上方春の庭前の云）紫上方春の庭前の云）くさぐさの花紅葉
本末をたてまつれるいとのさまもをかしくまさりておもしろくまされておもしろくちらす前栽まる紅葉
紅梅桜藤山吹咲乱つるとやうの事乃もとて（ヒフミカルル）うそびとまさりけるうつて秋の
前栽をいとしほのふまをまり（秋好中宮ノ）中宮のはまちをけ（作者の母方の祖父）もとの山まる紅葉
のいろこゆべさうに本もとうつゆしの水と紅くとゆしやりあれるまさるべ
き岩をたてくそ（略）秋の野とをうるふ作りうるそのこうふあひて
盛さされこぞれたり（花数是信ふ家の中方ノ云）ふのひんうふもじしけるのあるあるありて云のうけまる
きりはまちに前栽それ行をそれすぐしうつくしく本ぞうさ森のやうなる
本どもはふくおりろく山里めきて卯花ぞうもしたちまはしたて
てしりおりの花ちもるてしさうひくるあどやうのそれくく
をうくてまれの木まるのゆまうちはせたり系切ていらてしまどのおと
ぞたりらちゆひて（略）の中あそひおまるのほりまる菖蒲うく
げらせてもうひまミまやして世まるのさまをめ
ふ（花の所の西ノ方ノ云）ふ家の中方ノ云）ふ家の中方ノ云）ふ家の中

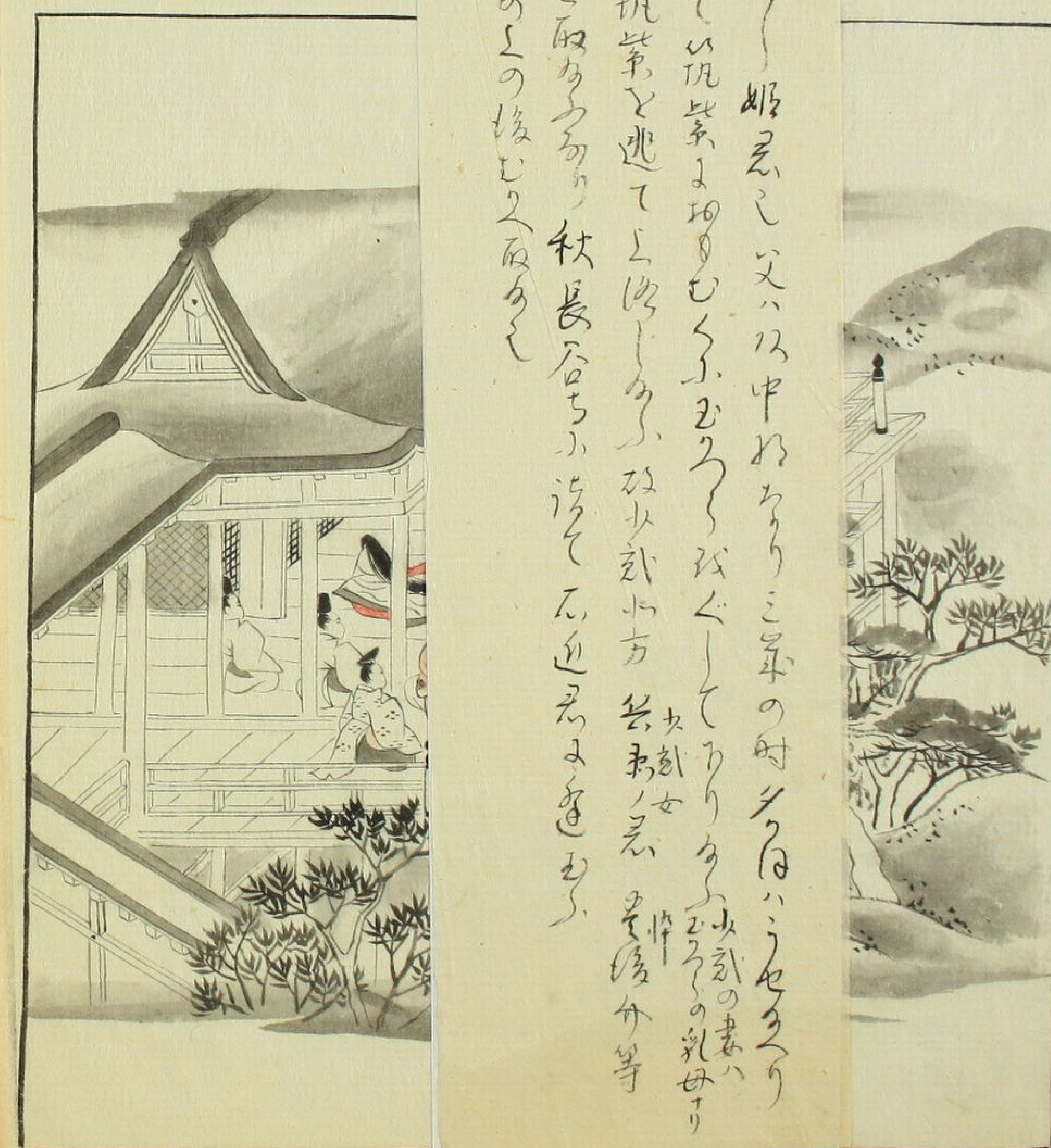
乙女

すり物ゝふの色のらしき色
いろ〳〵あるべし

秋好の中宮の使　オホキヤカナル童　紫ノ濃キアコメ
紫苑織物カサネテ赤朽葉ノウスモノ、カザミ
云々

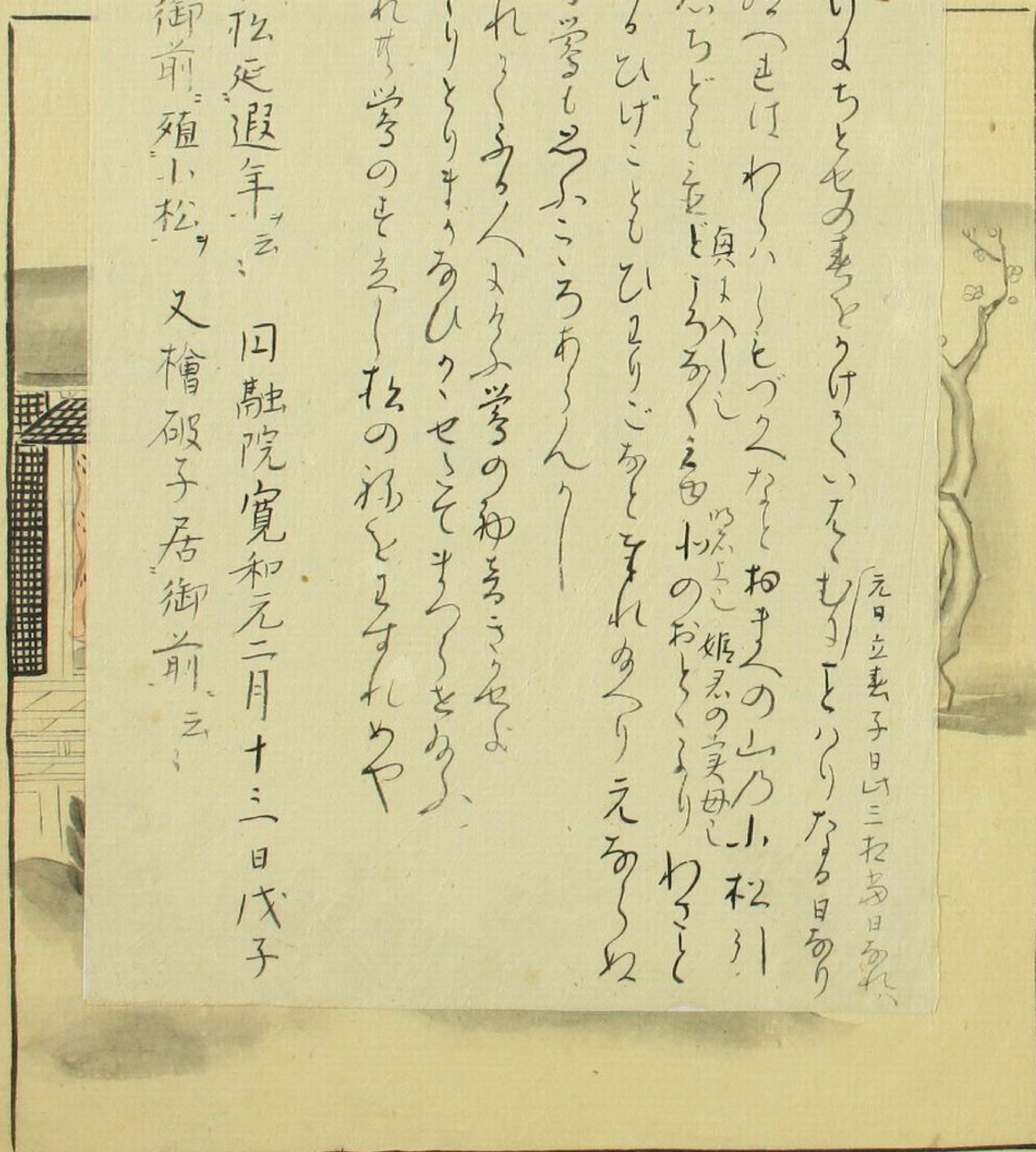
二十二 玉かづら

たまかづら君ハ夕顔の産し姫君にて父ハ頭中将なり三歳の時夕顔ハうせ玉へり
四歳の時少弐任国にて筑紫に相具しむかふ玉かづら成人してありけるに（少弐の妻ハ玉かづらの乳母なり）
玉かづら廿二歳の四月筑紫を逃て上洛しけるに故少弐か方（少弐女）兵部ノ君（忰）豊後介等
たよりなく九条に宿を取なとしけり 秋長谷ちかに詣て右近君に逢玉ふ
右近ハ源氏夕顔の失の後むかへ取玉へし



二十三 初音

六条院なり
けふハ子の日なりけりげにちとせの春をかけていはむにことハりなる日なり（元日立春子日此三ッ相当日なれハ）
（明石の）姫君の御方にわたり給へれば（源氏）わらはしもづかへなどおまへの山の小松引
あそぶ若き人々の心ちどもおきどころなく見ゆ（奥に入し）北のおとゞより（明石上ハ姫君の実母也）わざと
つくしたるひげこどもひわりごなどたてまつれ給へり
五葉の枝にうつる鶯もおもふこころあらんかし
明石の君 年月をまつにひかれてふる人にけふ鶯の初音きかせよ
とあるハ姫君よりの御かへりをかゝせそせよとそきこゆる
明石姫君 ひきわかれ年ハふれども鶯のすだちし松の根をわすれめや
髭籠（ヒゲコ） 檜破子（ヒワリコ）
十巻記云正月子日引小松延遐年云々 因融院寛和元二月十三日戊子
御幸紫野立幄屋御前ニ殖小松ヲ 又檜破子居御前云々



二十二

二十三

初孫

六条院し
やうしのをりのあきのはわひ　紫上し　春の所前のあさまつ　ゆうすゝきの
てまゝふれのゝ多れあ日のゝさと　よハまぢかりぬゝやと名つゝ
ゝ　略　ゝめいるゝ　ゝ　ゝ　

こて〻

蝶島ノ童八人ナリコハ畧セレナルヘシ

むりてくし　弓場のおとゝハ良所花数里ノ事ハ略ス　むりてくのお師匠わとに迎さ為し　翠簾

たいの法方ゝとりてくしてゝ　ゝぐるとわるんよりまゝりてゝらうの戸ぐちまゝと

あ我やゝふけるゝしていまゝらるすそこの仕木帳ゝらそゝそ

わゝハゝをつくるとさはるゝ　略　わゝやゝなる殿上人なとはめ我そ

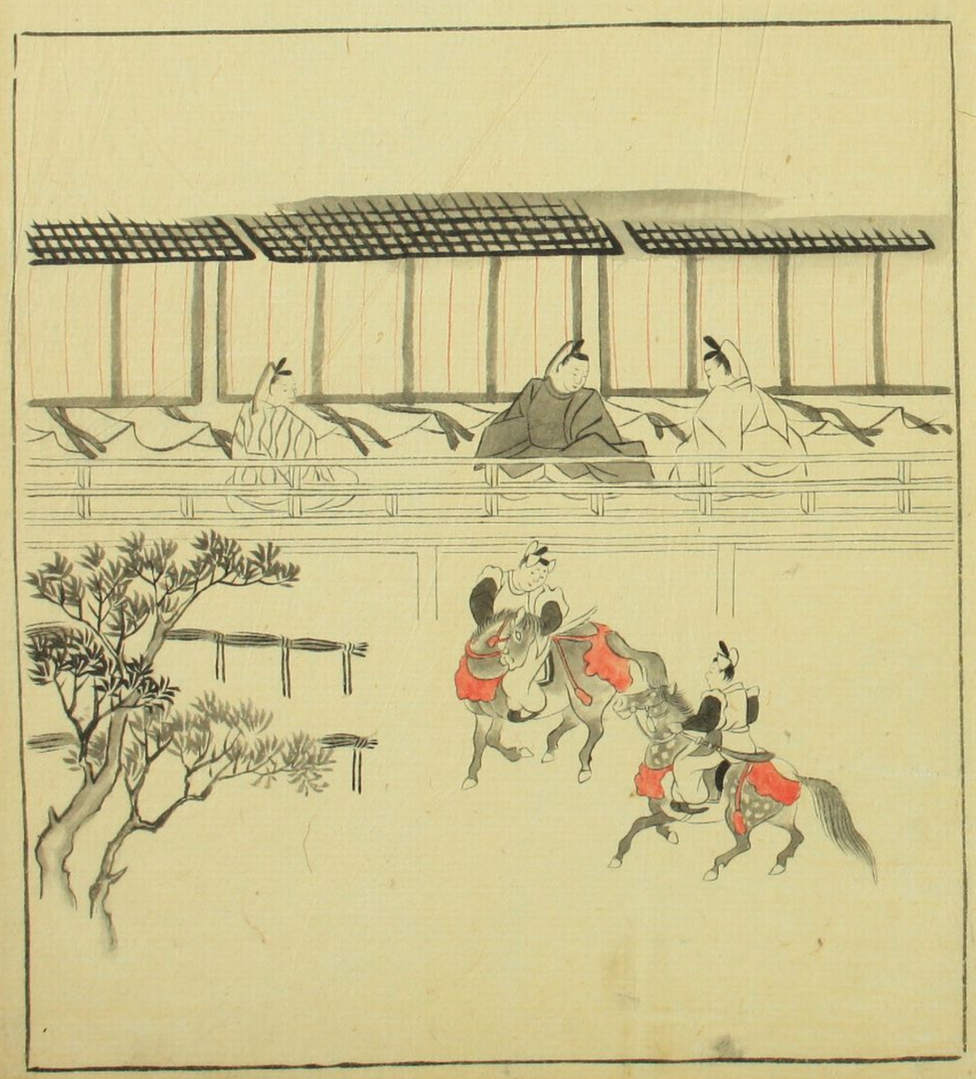
つゝゝさゝむひつゝの射だりまて　弓場　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ちおハゝつゝひたりてそゝひれ相ゝやけゝどふはさまゝりてゝ　近衛の中将

とゝ云し　ゝゝつれ給りてさはゝまゝハはゝりゝくあそびくゝしゝまゝ

すそこの仕木帳ゝうハゝろくてゝくびゝのとそを徒ゝても袋ゝてもこく

ゝ　ゝ　ゝ　



こたふそ

いとあり[伊氏]さ日ひんしのつりどのよりいそなてきくみ給
中なるの君てさうしひ給ちくしさ[六条院の御司し]ひとり[桂川し]川うりまれるあるちうり[賀茂川]川のいしぶしやうの
まれまくてあうしてきいくを

今川ありあるおまくのいろいろ
ゑゆくはがりし

かゝるに

しのびりをつくいとちぞくまりおそおりしのくしはと
[和琴ゝし]あるもあるきくまよの六日の夕月夜ハとくいりてきくしく
くまれる元を萩のきとやうしの日ぞなりまるり出琴伏枕
まてもろもそひふしの[夕月の]ありくあるの日ぞなりまるり出琴伏枕
ちまて夜ふ[伍のいし]ひとのとがめまんしくと学をび[四りの]ぶんとそこ
とれおまくのくび[笛]ひとこうきくへうるる弦はともなるたいふ
をめてぶつけさを[檀]いと涼しけあるやりあの日ぞりはゑ元色と
まひろうふうるまあこの木れをうまりたあの上をなくしうれ
ほとをきてさしをてきとそしうれハ

[内あの方へハ遠の方近てし]

二十六
こがるゝ

二十七
かゝる火

友きく

メ芳の宮乃袁げなる氣色をたゝちくてミもし多ふさ波いとおゝしうもきよひ　落桃色花田し

袁乃はゝそ乃つゝさ花よゆ也てれいまゝりゝ多あひゝもゝちハいと花やゝ

同桃色　色のこゝし

もてもやされておいすゝを波前なる人ゝハうちゐゝて三まゝ宰相の中ゝおなし

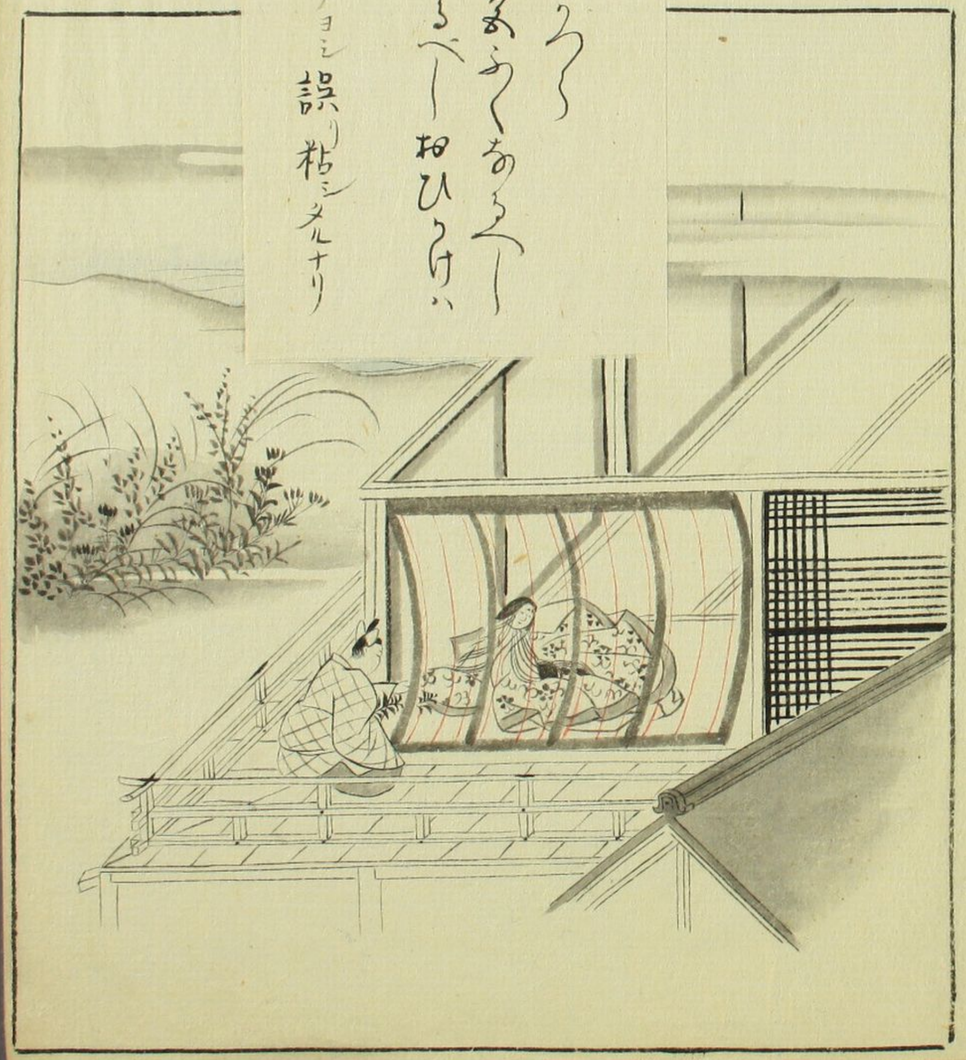
ゝしくさゝゝゝすておいしたりト略　例ゝゝの詠し　ゝゝゝゝ侍ゝ

ゝ芳のゝさゝ元ゝとゝふゝ

ゝふつゝでまゝやゝひゝゝきんらゝのの花れいと面白きをもゝりゝをゝちつ

まゝりさゝ入てきゝも波らんゝべきゆゝハゝゝゝゝゝ氣ゝいとらゝゝけゝおゝ

ゝりゝゝゝひゝゝゝゝゝ



男ハ夕雪中ヲ女ハ玉ノ
男女ともぶくさうふひ多ゆくあるべし
ぶくさうは玉ハまきなるべしねひけハ
わるゆゑしくし
入
此図奥ノ野分ト入替テヨシ誤リ粘シメルナリ

その志ハとり大原野の行幸とて世ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

冷泉院ハ製

[illegible]

大原野の行幸　野行幸ハ仁徳天皇御宇ヨリ始マリテ代々ニ行ハレ十二月ノ例ハ仁和二年十二月十四日芹川ノ行幸ニ行平中納言子世ノ[illegible]ヲ以テ[illegible]ノ例ト模シテ行ヒ野ノ行幸ハ[illegible]ノ時ノ行幸ハ延長六年十二月五日大原野ノ行幸ハ[illegible]ノ例ト御悔慰ノ[illegible]

光孝天皇芹川行幸ニ昭宣公供奉ノ例　河海ニ在

[illegible]

天下ノ農作行トアルソトテ[illegible]ノ行幸アルシ五民ト御悔慰ノ[illegible]

あとなれこ人のうぬ麹塵也一日ノ晴ニハ[illegible]

[illegible]ノ晴之義諸臣着麹塵袍　野行幸ノ時ハ左方ノ鶏飼ハ着青白橡地ノ摺衣之由競狩ノ記見ヘタリ　季部王記延長六年大原野ノ行幸其装束者御赤色ノ袍親王公卿殿上ノ侍臣六位已上着麹塵袍今案主上赤色ノ御袍ヲ着シ玉フ其外親王公卿已下皆青色ノ袍ヲ着ス下襲ハ元ヒ[illegible]ハ鷹ヲつかハぬ人のをとをとり　或用紫杉蘭色ノ綺ノ袴

[illegible]

季部王記　鷹飼親王公卿着地摺布衣及或紫木蘭地のさめれ指貫もきるもしたりなりなるきぬれるなり色ぶくろを付ヘシ　冠光衛のふりをとるヘシ　仁和の芹川行幸ハ行平の中納言ハ下ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

みゆき

きおし打ちりてとありぬうきを京にふれあるし
仕ほうれもいろ変るゝ云ゝ麹塵いろし
うゝ麹塵仕丁ハ外いろ変るゝ

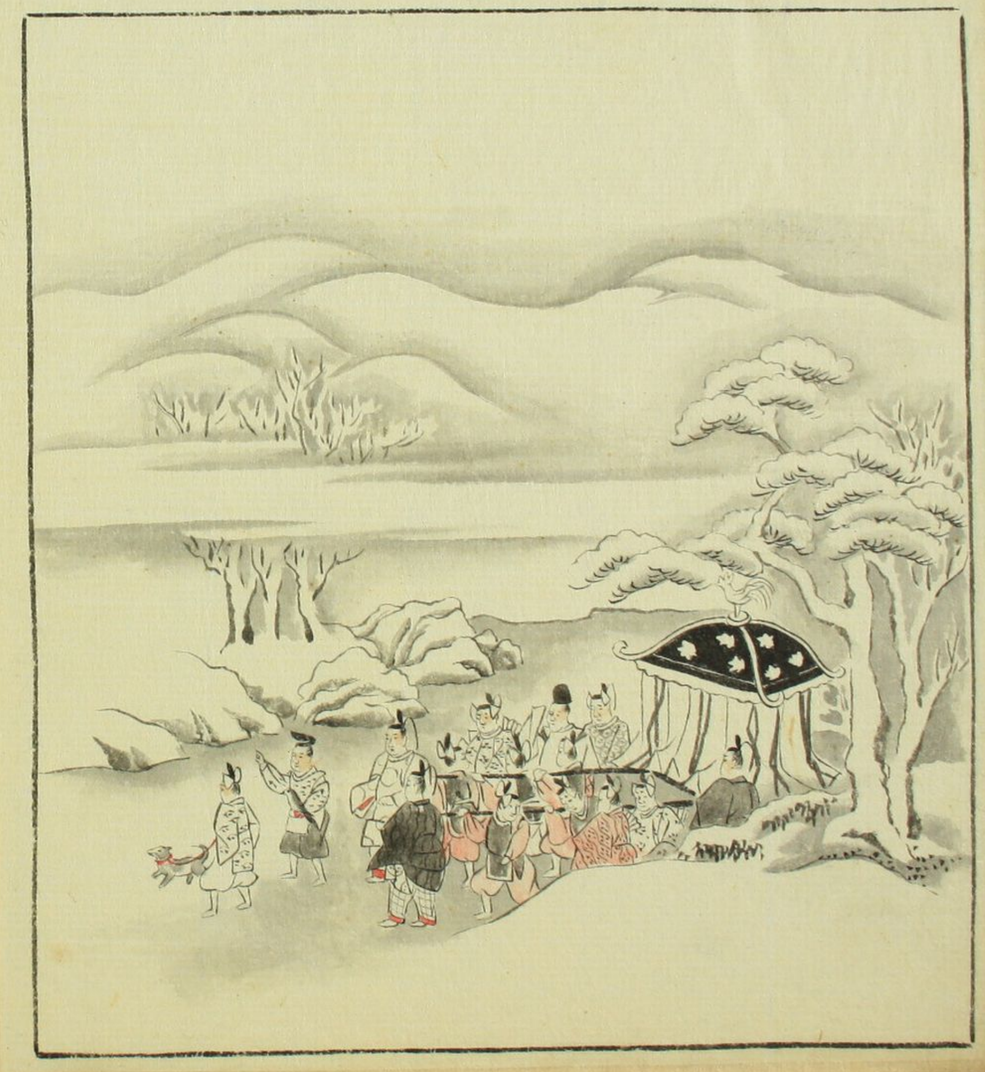
四季わき

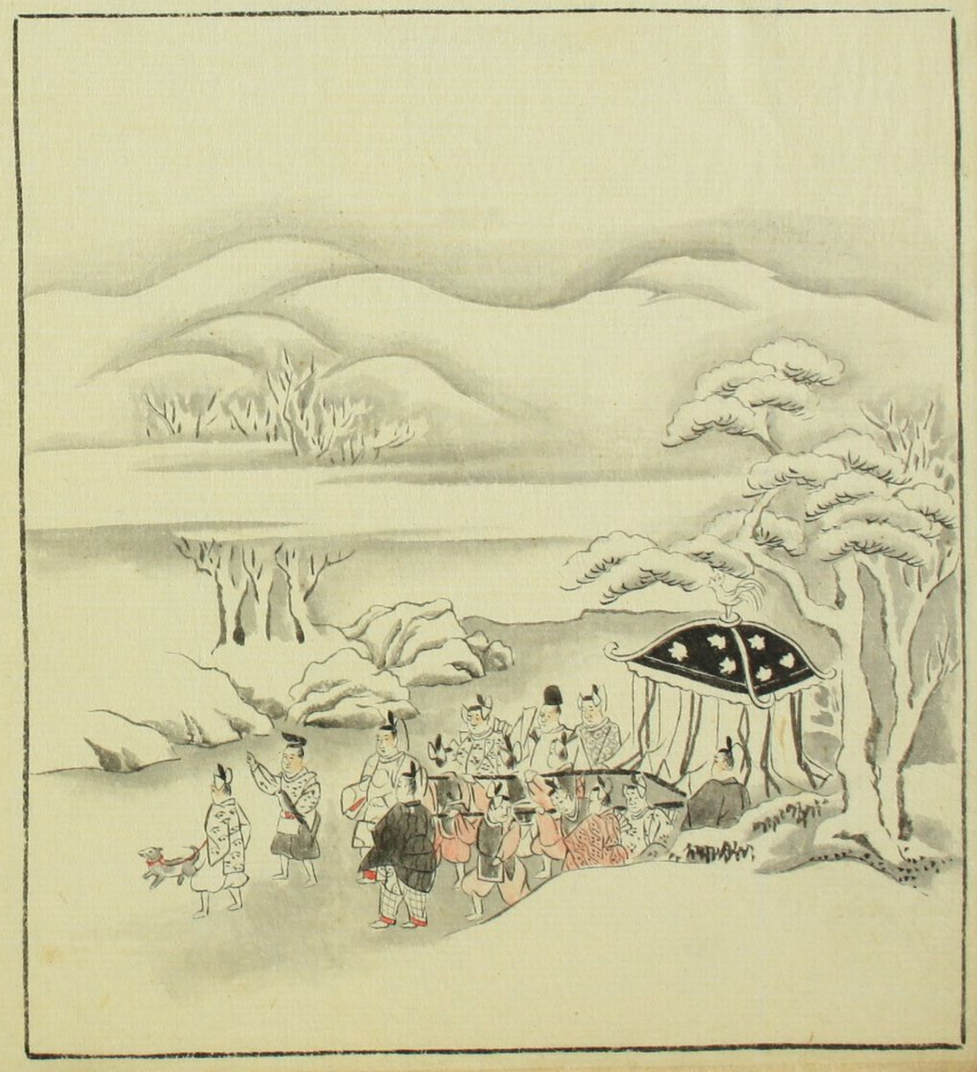
今此度女あるゝハ

（小殺のこまし）ふゝまでうあけてはのうるのあさからけの後よ（中字の仮方し）ゝとまゝ
あげてくゞるゝうらんかもゝ（中字の仮方し）ゝうゝとしてまゝ（中字の仮方し）ゝ
うちとけゝるをいうぐあゝんさやうるゝ（中字の仮方し）ゝ（中字の仮方し）ゝ
いつれとるくおりゝ（中字の仮方の童女し四位ゝし）わゝをゝくおろさせ（中字の仮方し）ゝて（生絹し）むしのこともよ家うえを移りり
ゝりをゝんるゝでゝこのゝこゝうゝをゝきあこめどもゝをゝるゝのうぐゝあゝ
やうのとゝきゝまあひゝるゝさはゝあて四ゝ人ゝをゝりつれてゝこゝれくゝむゝ
ゝりていろゝのこゝ（虫絲）ども残りてゝさはゝもゝひゝるゝでゝこゝるゝのゝいとあゝれゝげゝる
えゝぐゝとゝとりゝてゝまゝる
女郎花ハ面の竪ゝきくぬきハ黄ゝて裏ゝりえゝきし

二十八
ゆめ

二十九
みゆき



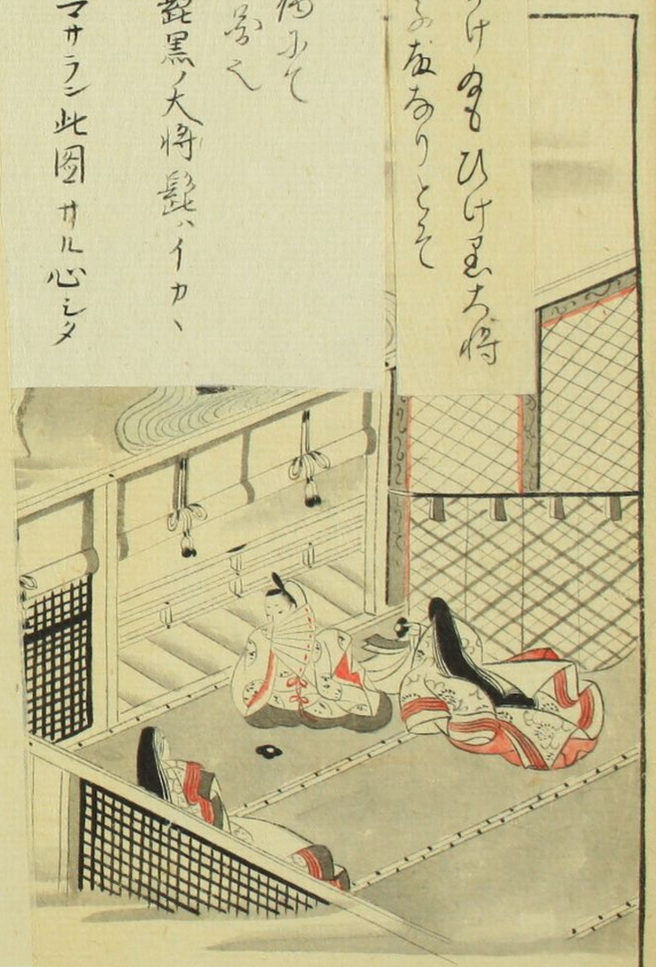


西き柱

小の方ひけまる所をうけまもひけまる方将
ゐうゝゝよんをうけゐふ友なりとて

今
ゑけまる方へ　小の方
火とりぬ所をうけまふ家く
文
夜ノ夏ナレハ燈臺ニアルヘシ髪黒ノ大将髪ハイカヽ
画ノヘキヤ
藤
燈臺ハアルヘシ髪ハカヽザルヲマサラン此図サル心シタ
リトミユ

小の方病中なる又武尊宴より小の方を
出迎ニまゐりなる稚児の君も母小の方し
付る式尊の宴へ参りまふあり



一年に付ては四季ごとに〳〵
二月の十日ゑとこ〳〵ふりてゐまへちりこ〳〵紅梅さうりよ
程ゝ多尊の宴ゝ
花の宴し
ゑのふむりこ〳〵ふりいさなる所中なれど清ゐくゝ
へありをゐて花をめぐつておそする間ゝ
梅の枝ゝ付しる所ふゝ
そこのすゝゝ系れるようとておりこ〳〵ゐ
やされしゝ
ひさらくゝゝゐひつ
つゝれゐへりゐ
さむをひしるゝとのさゐ
あとてゐめとあゐる
舞姫ゝ
花のゑはちりゐ枝ゝとゝ〳〵ねどうゝん神ゐあくゝをまめゐ

浮き柱

今
をけまたはへ（十の方）
火とりれ所をりけるよ多く
夜ノ夏ナレハ燈臺ニアルヘシ髪黒ノ大将髪ハイカヽ
画ノヘキヤ
文
藤
燈臺ハアルヘシ髪ハカヽザルヲマサラン此図サル心シタメ
リトミユ

たれの姫君とりまき柱の元とをり
つねるをもみるよひむりおまての
人よゆるんちし姫を家をひめ見ひたぐを
のうこのうこいさるうさてをしらの元まれ
とうをざ浮ようりのいのさしてをいれこ見ふ
いまはをそやどれぬともあれさつるまるの柱の根さをる多

○姫君をぐしく外へ
出給ふをうらうて
あり　をハ一説ニ
別ニ侍リ

ノフヲト　面ニアリ六条院の屏ふこ（四石中宮十二歳ニシテ裳着ノ時遊ア之）
花人石のうゑ小もあるとの内あそび乃うちあるしまれこと
して屏ニ人なのどあやうく多りておりうさ猫の言葉ア也門の柏木いとの
歌中ノ弁柏木の弟少将なりとけざんをうりまそ遅あまりをつるとをくめさを弾てはこぐを
めを宮のおやまへまひをおとぐまさうの内ことを系て汎中ノ和琴ニ法ありてを
おやふうきたてる花いとおとをろく中也宰相の中ノ弟ふこ笛ふきぬふ相り
まあひしる調ノ雲井とをるバうふうきてたり弁少ノ柏ノ子とりて梅ノ枝
此花の名をまゆれるう
いしるる花いとおり下略　まとをよ
ようづりの内をとの内あを〜乃内ふ
不をへてはは車ようをもの　芳文　花のうをえをる神ようりしとて
とあやまりといまやとゞをん
位とまさ方松　白ふ方梅ある
梅ノ枝　催馬楽
梅ノ枝まさ多ノ曽美ふけてをれ所
まうけてあけともいまる書ふりて辰
下略

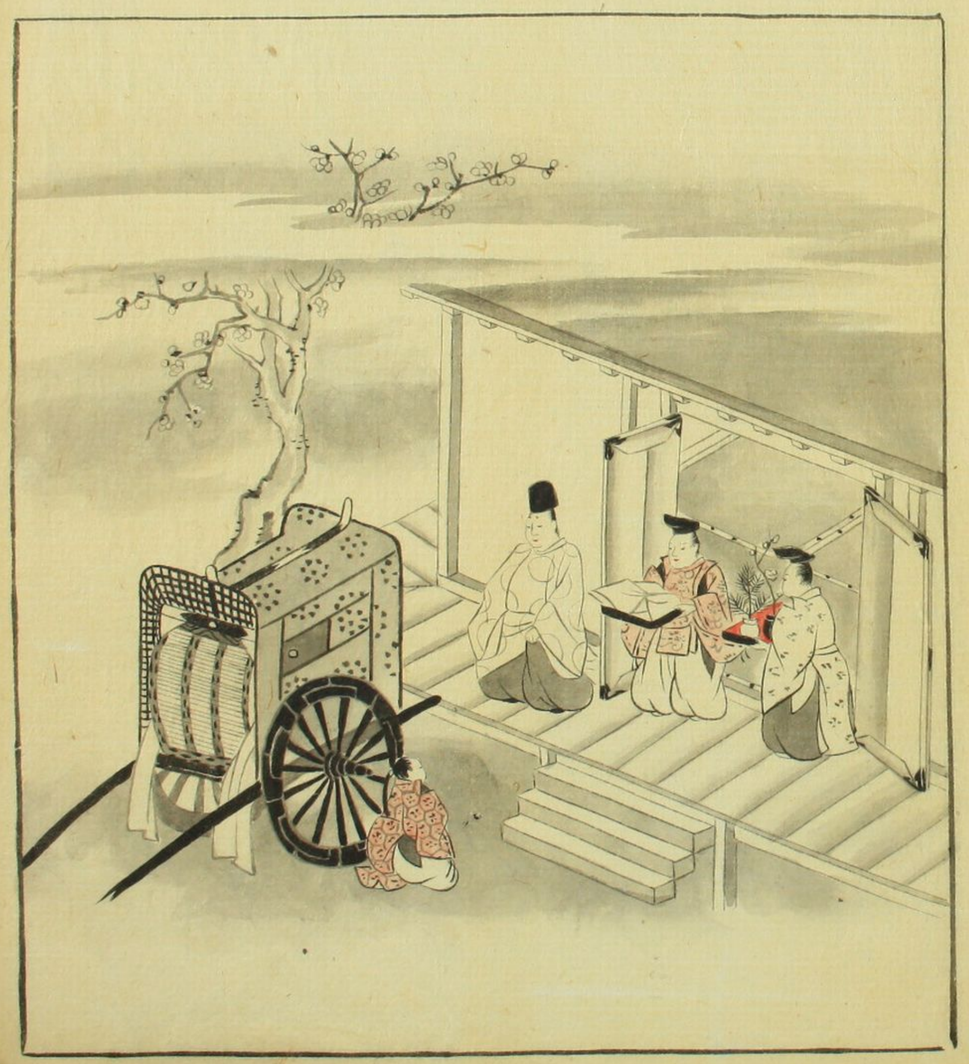
三十一

ほき柱

今
ゑけまたれへ幸臺狂病ふて
ゆとりれ床をりけるよ多く
文
夜ノ夏ナレハ燈臺ミアルヘシ髭黒ノ大將髭ハイカヽ
画ノヘキヤ
藤
燈臺ハアルヘシ髭ハカヽザルヅマサラン此図サル心シタ
リトミユ

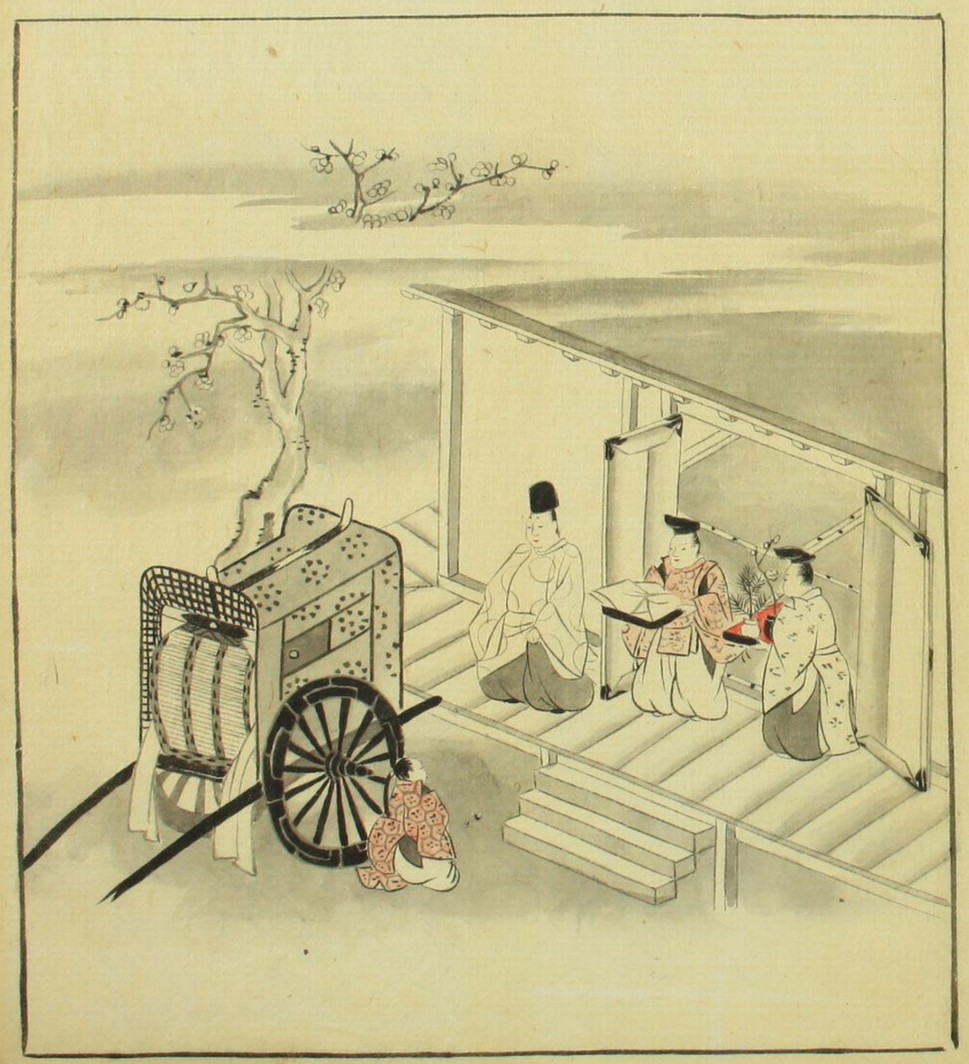
三十二

梅ノ木へ



三十一
ほき柱

三十二
梅の木



七月し　内大臣の屋おろし

七月のつゐたちころおほゝしの萩の花いとおもしろくさかりなるあそびなどしてこゝにもそくさんとおもしろき言ひ花のふくゞ多きれうに歌中わしてちをりそこあり　下略

ゆふこよい　汐位　月の光　ちりの様　花ろうのこゝ

ふくさうとさて萩のうゝ紫のとうちもそんじめるは気をもうりて歌中の花の名こてゝしふさかがきをおりてきらうとの中盃ちくるふ蓋のさまして

やもしのねゝ

汐位天作

しゝこれるようごとハのけん萩のもきんじうすごてこれたれども

幸れさうつさを拾ゝ〳〵きだりれとしめるしめのふさをいとゝあり

夕雲方

いくうり御けさ者をそくさて花のひもとくゝりふたゝん

一幸に此紙のゝ〳〵ゝ西ゝこゝまゝ〳〵ゝ

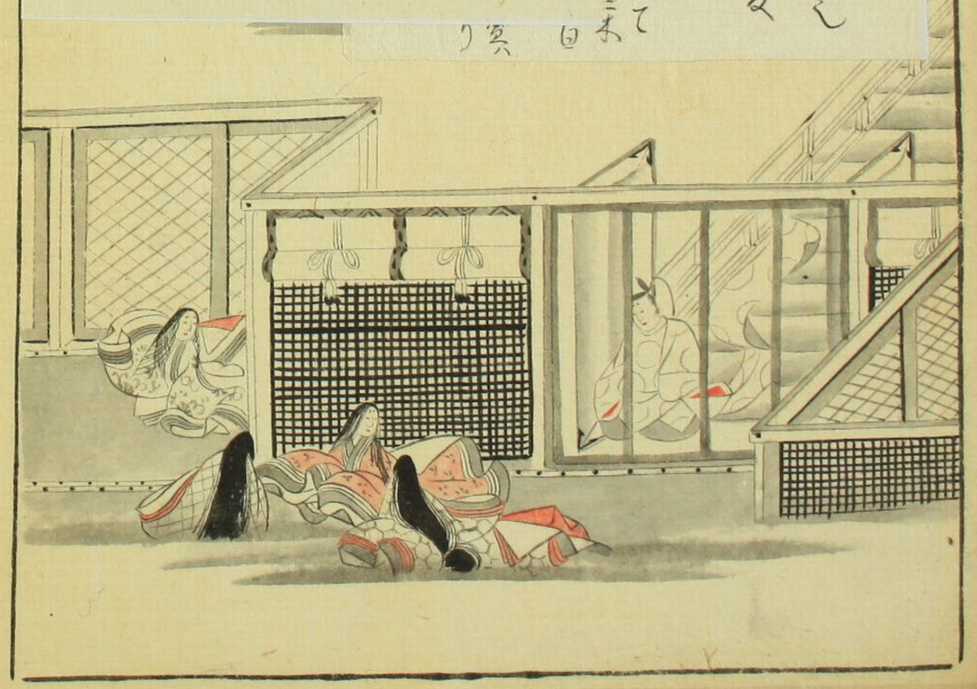
七月し　内大臣の座おろし

七月のつゐたちころおほゐの殿の花ざかりなりけるあそびなどしてあるべき
ほどにもあらねどさこそはさうんとはしらさりけれ　夕霧ひけ
言ひ　花のいとゆゑ多きをれらに頭中将して　ちをしそこあり　下略
ゆふこゝろ
なほ　月宿の花れ名こゝろそれこゝろの
夕霧　これは雲井なれるをりのりうすし
たゞもこゝんの
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　

ここハ藤うへの局なり

女あるじハ玄丹丁ノ男さゝ雪幸ねゆわし
なをしハ源氏の出家乃ち死いろはさ夏
なをし　ゑひいろは語なる

式部前ニ云花ノ宴ノ巻ノ中三月廿余日をれて
唐ノ椅　さくらあ日
源氏の裏束　さくらの花ハ紙
蒲萄保のもゝうねとりいとなゝひさ
て　下襲のとり也則裾のるし
直衣布袴ト云　おなじ
皆人ハ袍なるふあゞれゝる　親王の姿やうなり下略
なほ色をうけゆく　源氏の云いうゑひなや
なるこゝろもてなり　ゑひなれとうなひ
飯ノ女一の宮　女三の宮ノおり　ゑんゝ
しの戸ぐちなおり　てゝうゑなり下略



文

ここハ藤うゑの宴あるべし

女あるじハ宴半ノ男き夕宴幸れ申わし
なるをハ源氏の君歌ひ給ひ花いろはき夜
あるをしこ乙ひいろれ語ある〳〵

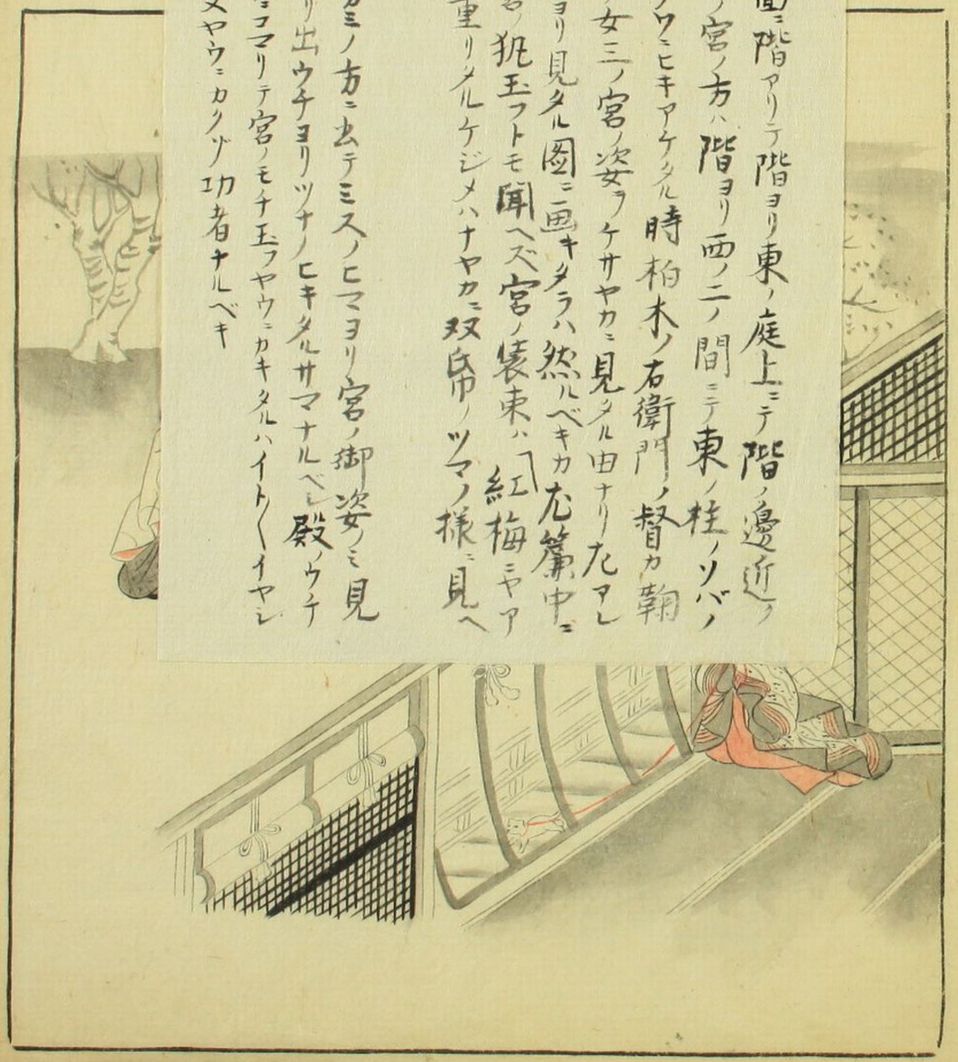
此図前ニ云花ノ宴ノ巻ノ中三月廿余日を
二条右大臣家ニテ藤ノ花ノ宴アリシ時源氏
布袴ヲ着シテ二条ノ第ニ糸リ玉ヲ図ナルヘシ
故ニハ枚目ニ粘スヘシ此所ハ奥ノ鵜飼ノ図ヲ
粘スヘシ

さく桜ニ木ぞと面白
あづての宴
をくるあり

三十三

藤うら付

三月六条院の姫君の御方に（柏本）残るとまりめるり（柏本）おもしろうはなりの御とて



凵図ハ寢殿ノ南向ケノ所ニ正面ニ階アリテ階ヨリ東ノ庭上ニテ階ノ邊近ノヨリテ靴鞠遊ビアル体ナリ女三ノ宮ノ方ハ階ヨリ西ノ二ノ間ニテ東ノ柱ノソバノ簾ノツマヲ猫ニツケタル綱ニテアラワニヒキアケタル時柏木ノ右衛門ノ督カ鞠蹴タル庭上ヨリ乾ノ方ヘ見込テ女三ノ宮ノ姿ヲケサヤカニ見タル由ナリ尤マレハ凵図不叶カ凵図ノ侭ニ裏ヨリ見タル図ニ画キタラハ然ルベキカ尤簾中ニ女房達数多アルヘシ猫ノ綱ハ宮ノ犯玉フトモ聞ヘズ宮ノ装束ハ紅梅ニヤアラン濃キ淡キスギ〳〵ニアマタ重リタルケジメハナヤカニ双帋ノツマノ様ニ見ヘテ猶ノ織物ノ細長云ヘリ

此図ワロシ女三宮ノ御殿ヲカミノ方ニ出テミスノヒマヨリ宮ノ御姿ヲミ見ユルヤウニカクヘシ猫ハ簾外ニ走リ出ウチヨリツナノヒキタルサマナルベシ殿ノウチノ見ユルヤウニ画キタル故ニツナニマリテ宮ノモチ玉ヲヤウニカキタルハイトヽイヤレコヽハ殿ノ内ニ何モ用ナケレハミエヌヤウニカクヘシ功者ナルベキ

三十三
藤うらけ

三十四
ゆなし

三月晦日し　つこもりの日ハ人〳〵あまたゝ参りあつまりあはれ　柏木のふしのまゆりむしあるあのし　女三のあるかれ花の名ともそやなぐさむとそて参りあれどそのあるかりそぎて三月たちぬ三月あれぬ　はねとしとしこの院よりうまこの院　ひけ馬とさうし　たんたんわさほはあるらひうて参りあへ　射　歩　ちゆみこのそぐれなるこ

あるべしとさつて例のつどひあつたんたんわさほはあるらひうて参りあへ

中がわすけたちあるといふらいしてこゆみこのそぐれなるこ

手ともあり名れば百いそでおさせ給殿しとうまとるとうしなれまえ

てをうぐをあるとうしなれまえ

ちりぐのんこ函とりまうゝわうあるをてゆくまきよ名ふまとぐむうすえれ

名〳〵きもあはゝ〳〵〳〵〳〵ぐうゝ名ふ名ふれのうげいとぐたりゝやとか

らぐ人〳〵〳〵〳〵をひすぐあるてうんあるうけものどもこあるゝうあるゝ人〳〵れ

はこうゝうえぬべうをやるさのうをるのうをるのうをる

若草下

柏木

柏木病中あれはし
法師師なりもはりくハ女の昊とのさうるひゃくれハさるこゝろやと
ねがをどさらるねのけりあくれいでくてもなきよおもふ
くるくるとをもふ強たをし
撫子なるつゆ
川べさきくてあらくるねどろ
あるふくやつきのふくさ月もやうくんさ
ろくくて
まぶしハ目し　川べるくしくハおそろしさんし
殿仕大臣ハ御子柏木を大切ゑひあるふり　強たなをもむひのふし

三十五
若菜下

三十六
柏木

三十七

横笛

今女三宮そき尼給へる御のそきなるハ

朱雀院より女三へ贈られなる　野老（トコロ）　筍（タケノコ）　あり　此文ハ

らいし　菓子（クワシ）　たつつさのすぐるころそ　ハ

ぬりかけのふくをあふのけしろやうなるあなりを　ちふち紙たるく

しるあし　内ハ朱漆　外ハ黒漆　螺鈿（ラデン）　楯（タテ）子　内蔵寮　被納之

若君ハ　めれとも　御　ハ　わるくまゐりけるはさてをひ　ゆ　ひて　此　神をひら

まつれすり給さ　ハいとうつくし　さ　ろ　ものの　ものの　のこ　ん　の

紅梅の　ぞ　のすそいとなつかしくこまやかなるをひきやられて　此　身ハいと

あつハ　そ　こ　ろ　の　ほ　ま　る　さ　ま

三十八

すゝむし

六条院池の蓮し　女三宮

あ　ち　ち　の　花　の　盛　み　入給　の　姫　宮　の　内　お　仏　ど　も　あ　ら　い　ら　く　ま　る　侍

ゝ　せ　さ　せ　給　こ　ま　こ　ま　ハ　ね　の　君　ハ　ね　ん　さ　し　て　ま　ち　給　通　ご　ろ　の　く　ど　も　ま　る　み

ゝ　の　く　さ　ま　な　る　を　や　う　く　ま　ち　ま　を　給

宋　し　た　金　の　ち　ち　ま　ち　給　ま　ち　の　ま　ち　の　ま　ち　と　ま　ち

秋　ハ　ま　ち　の　ま　ち　給　ま　ち　の　ま　ち　の　ま　ち　ま　ち　ま　ち

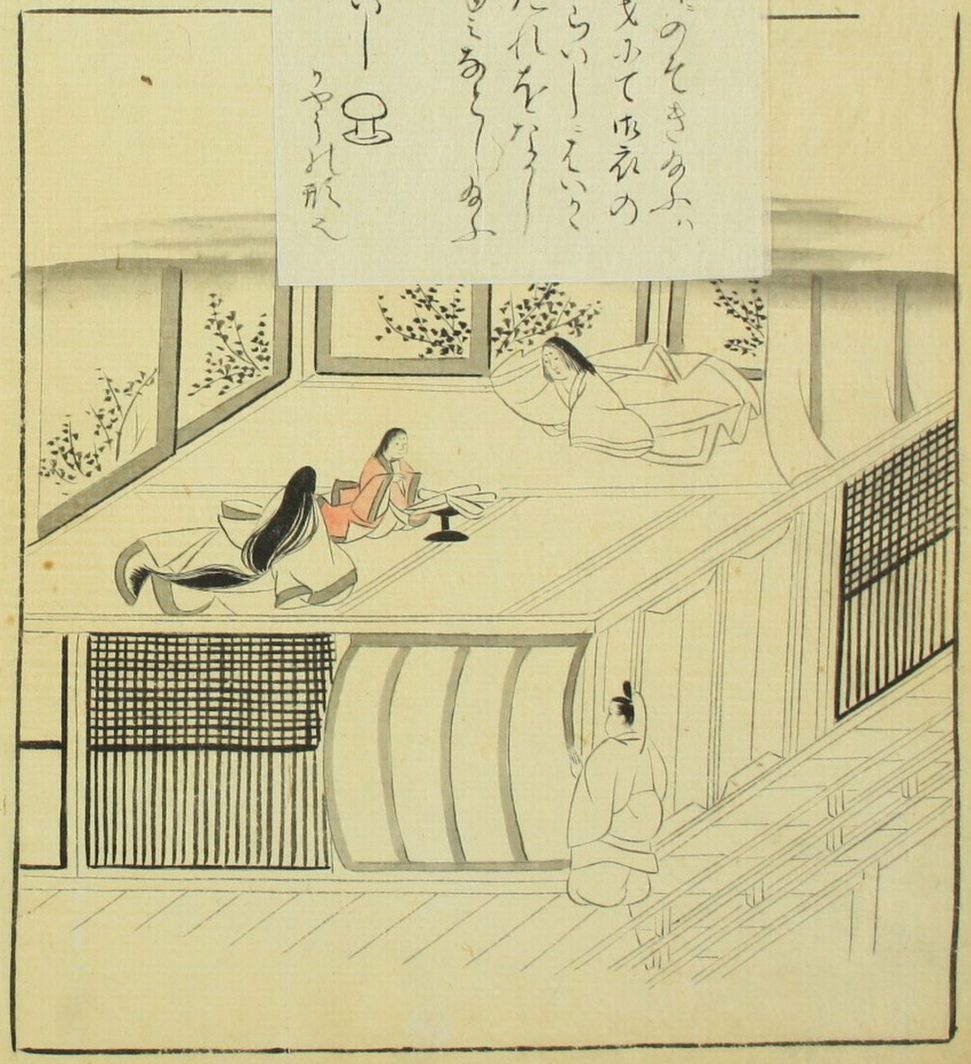
三十七

横笛

今女三宮そき尼給へる御ものの中に、源氏へちごいたる御君に文ふてはこの
きりうしろに引ゆ〜らい〜こえいと
り弁れをふきりよたれをなを〜
かゝゆふ〜ゆ〜わつふあゆ〜ゆ〜
と有とり付立吋ぶし
ちご形大きゝ〜わろ〜

らい〜

やうれ形へ



三十八

すゝむし

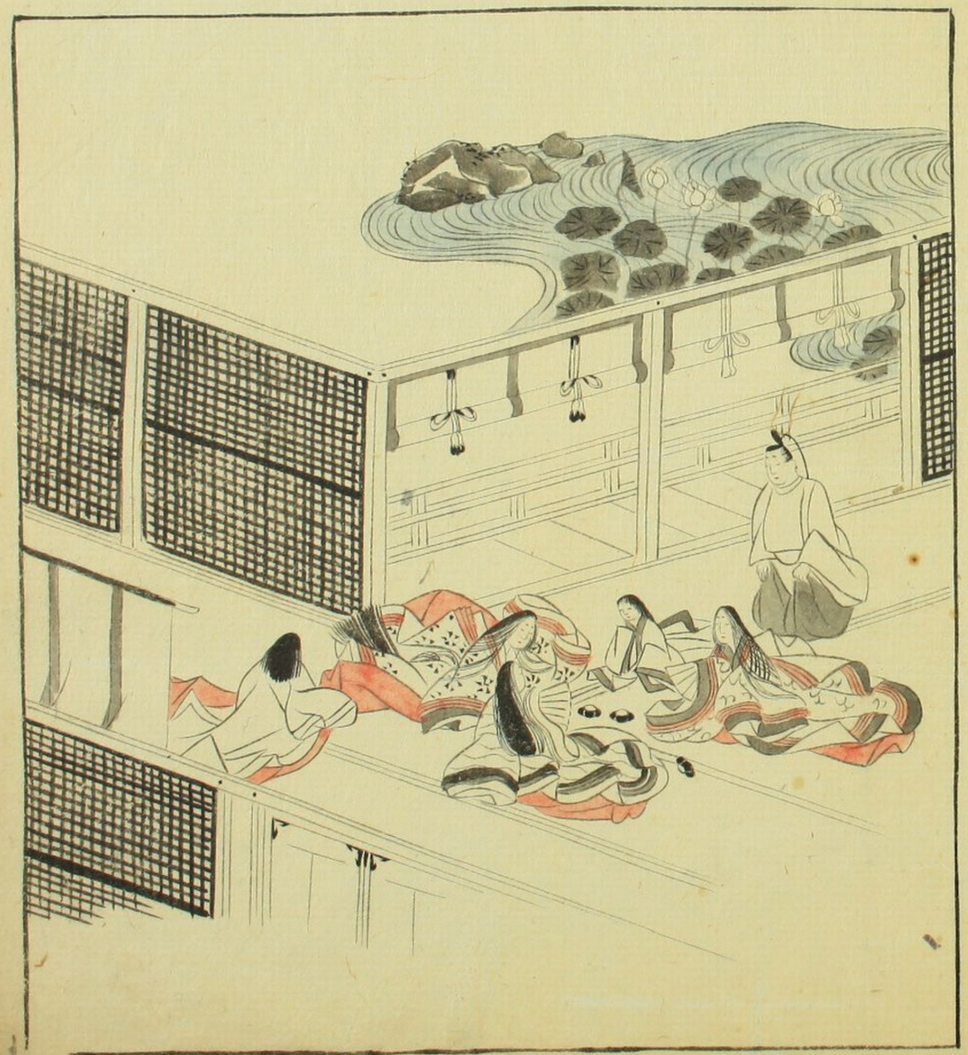
六条院池の蓮し

女三宮

友ゞうたちもの花力賀ゆ入給の姫宮の中に仏ゞもあ〜〜いとく〜ゆ〜る侍り
紫ゝせさせ給こゆ〜びハ和〜の君れ中ゝ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

三十七
横笛

三十八
すゝむし



九月十五日小雨こゝろ
ゆきて　御門つぼ戸のもとふえ
こうてふりあつてえをつりあつ
くもそるくるほどひてはふくもうこ
きるよいとくにんとくるよて
つべきはりうれとゐねるようりの
んりうもうべりゆくいうとべうと
夕山星の衣をそるくりよらそんこ

ゆくちとけぬるまくの山神のあくりとなるえ
りあはめそらくうげよ（世の神どもの心）りるんいちもまり風いとんおそうりけ
ゆくあのくさもものねもちかのくるも魂の言もひとつよぶれて
えんあるれ

ひとつ又うるくんを

文

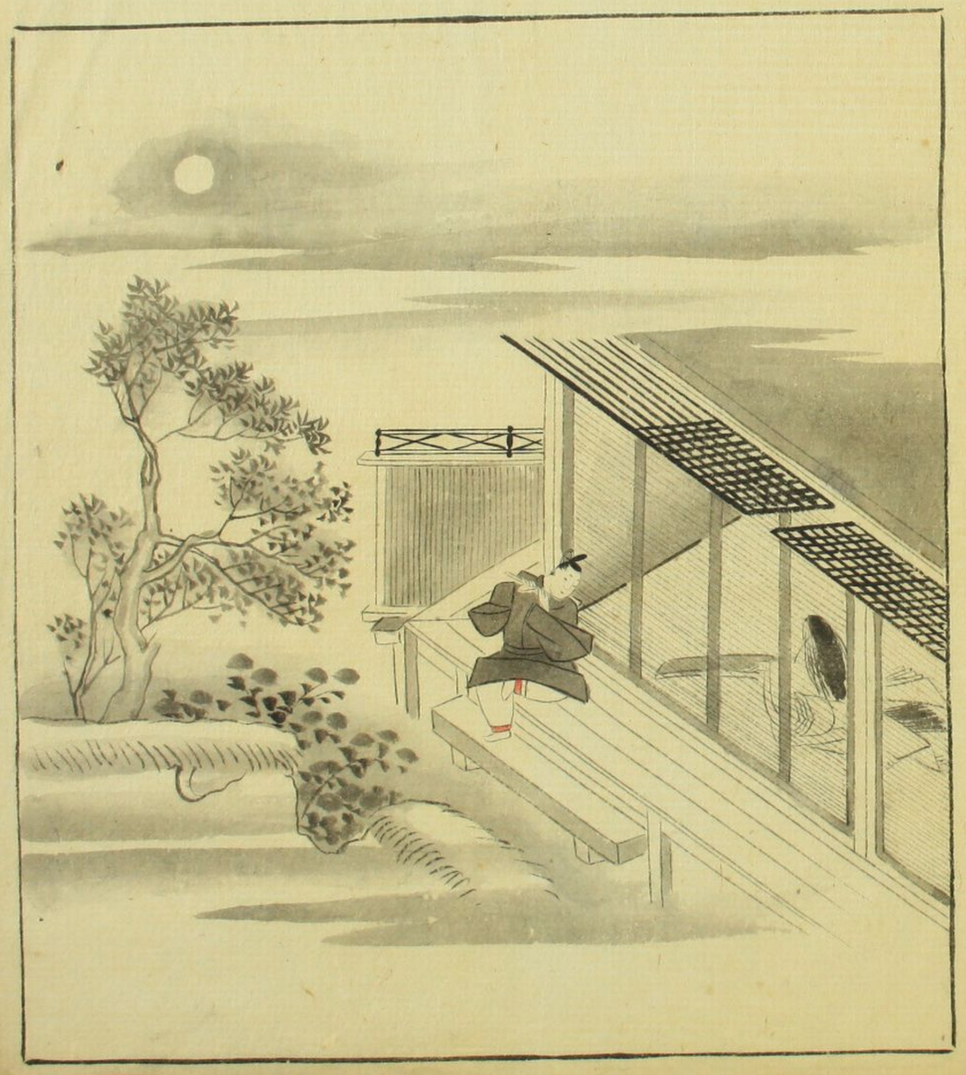
式和へ前に出ぬ八枚目の舞楽図を粘メ御法の
巻より。式図ハ箒木の巻雨夜の品定ニ左の
二条況し　紫の十日のあれハ花ざかりにて
枝ものとて　活るをすて又梨も面白きとし
ろしかのぐとめひ朔からけ夜の月ろ
まるくんとめ夕いし　紫上の御ましも月ろ
こゝろとまりぬくくまわひまるくてもくちやりの鳴るも笛の音よをそぬ
んちくてものくあるれもはもくろさもれこうぬほどよ陵王れうわられ舞て
さうるるるるとしへするつくこのぐくさるのやく
紫人れ裳束の祝し舞の姿よ唐ぬさうるるくく
くのぬざりけくるものいろくあるも

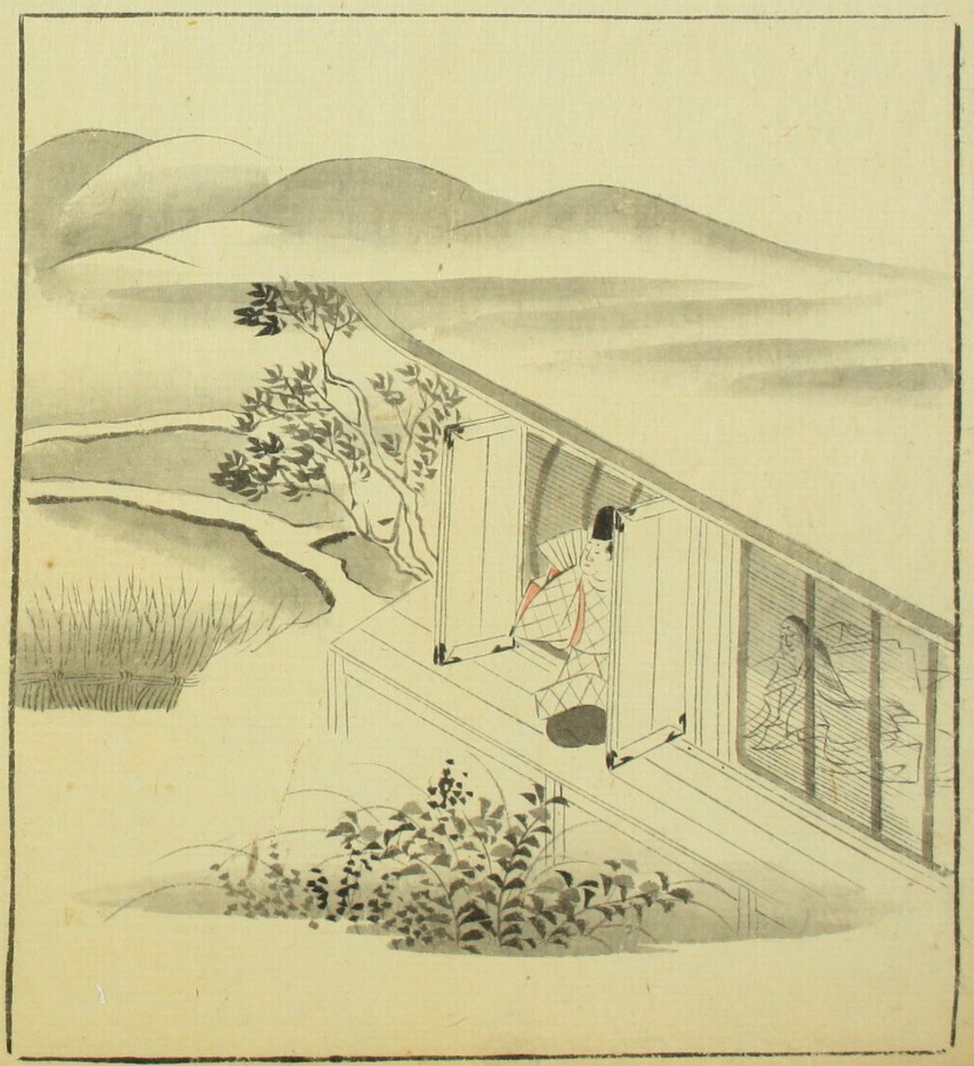
活法

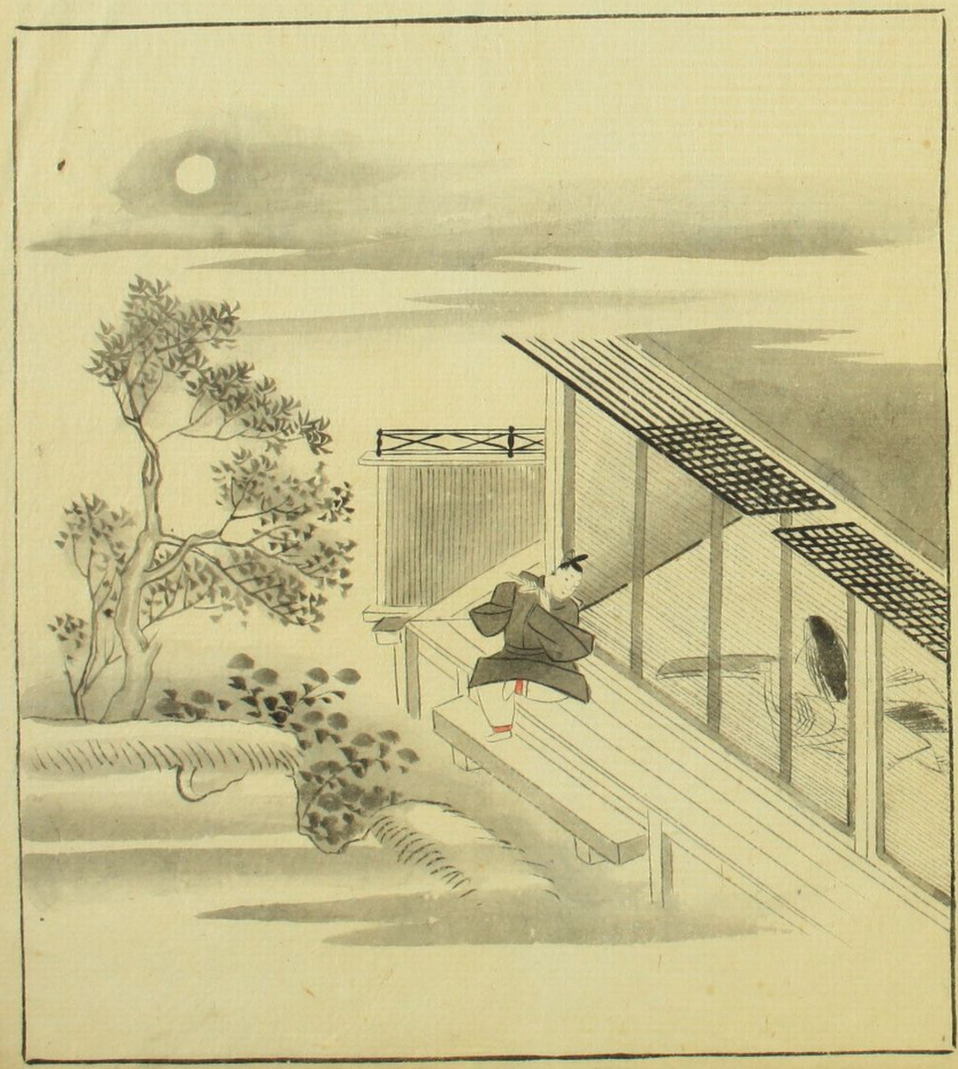
紫上病中のれハ活る稍ひてくるくあり

九月十五日小雨こゝろよりて　御門つゝ戸のもとふえすりあて
こゝろぶりあるべくて　五月つりあつりさはどのあるとしろ　ろこゝろ
人ども　そのくるよそどひて　ねふくもうるこひこうるあもくるさり
ものよりとくに人とくあるよて　ゑいあるあるある

九月十五日小雨こゝろよりて　御ぐしのつまり戸のもとふたゝりて
やうそをうめくごとくして立なつりあつうしきほどのをとゝ
なるうちぞのうちめいとけうじまはすさやうなと云んじ
ぶるぶるふんまるしさしきたるまはゆげよりざとあくわふぶ
さしくしまるまつさ女こそうハあくきろれそれぶ
まくいうぬをとりん女二の山方のくんじるものろひれをぐさめまもりべ
くるきしくるのまひしてかわりをとりさそめくて
すのこれ移をなけれどわくるよんやわぐんとうろめくて
此ぶいけ辛文の翁之あり



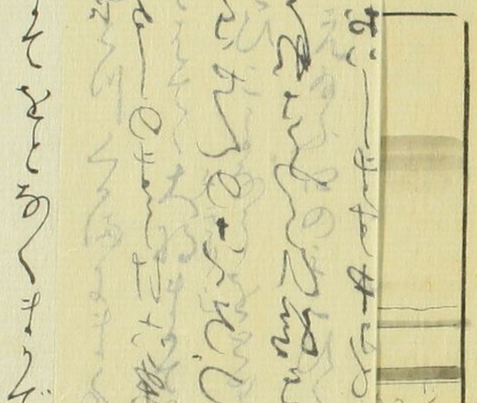




つもりふけり雪うれと云式ものつけ（俗のし）なる（女三宮）ゆきのあふ時のまと云ゆゑ
はるゝゝのさひしさもいふるあくうめ
神無月を大ゝもをぐれがちなるけいとぐるあるひて夕雪の空の
氣色ともえをいそぬこゝろ用そさるふりしゝどゝひわりごちおそを
ゝと乱らるゆし雪わをまるる所のつゞさもこうゝやまくまれふ
いとつれゝくあれゝ（女三）人々の家乃はるゝまりあふまわち家（白家し）もくは
ゝくれておりまそこるゝの慧（慧し）君とそりあそび花をゝ
ふをくゝるかゝといとけあり家（女三家し）ハ仏の御まへにて殺をそゝ
殺生

六条院へ　慧五歳　白家六歳あり

光源の名もゆゑしれかや



宰相中将いまけ方そをとゝのくまうで殺るけを慧（慧の君し）こゝろ
ますを左をりよ条殺まじやと車をゝとゝめさせて（慧の君遣し）ほ子の男つ
秀殺中納言大大弁などさゝぬ上達部あまゝ見物るのりまを
とゝざるひしてゝ六条院へおいするを
てえんあるゝそうれ世也

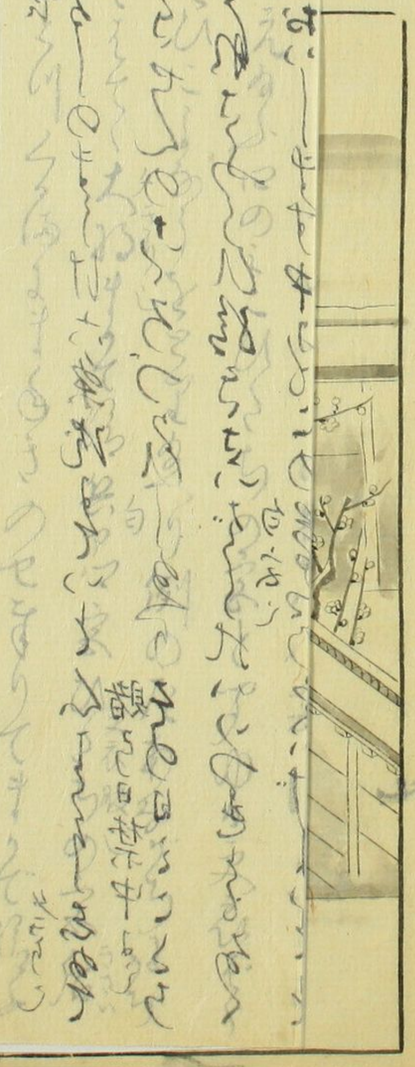
賭射をてゝち方の大将ハ里亭ニテ還饗と云ををりし
ハ時夕雪右大臣大将ハ六条院ニこれをりふ
まけゝの人ハ必早おする例し慧宰相中将まけ方し

つまりふけの事なれと云共まつけ（俗のし）なる（三月四日のすと云なり）いそのはりはこてちするよ
はるなるのさひしさもいふなるあくうの
神無月を大なるもなぐちなるはいとぐあるあるひて夕雲の空の
氣色なるもえをいはぬこころはそさるふりしうどひはりごちおをを
雲わをとまる所のつぐさもこうしやまくまもれるふ
大空をとるふまはろしなるこはむのはるたつ
紫のし
多くをつくうをきはしうばはをるをれど白ひちしるふわうる
まろがさくいさはるなりいでひさくちくさぐ本のめくりは本丁を
たてくるひくをあげどいはもえふきらくくとくくとくくの
白文六はるあるふ
色葉の名もろくれかや

軍相中わいまけ方しそをとのくまうで船るけるを尼こうちおい
ますはをくりる糸り船まじやと連車しをくくとめさせてはるの馬つ
乗、接中仮云たた大弁あどさくぬと馬アあまくはこ投るのりまを
とざるひくて六条院へおいするのやく移ふるよ言くさかちり
てえんあるくそうれ世也
賭射をてくち方のたわれ里亭ニテ還饗と云をりし
ハ時夕雲太大臣たたわるて六条院ニこれをりふ
まけくこの人ハ必早おする例し葉軍れ中わいまけ方し

つまりふけ方を云伝(原のし)まつけ方なるべし(三ツ盛り肴の事と云なり)そのわりはこちするは
ちろ〳〵のさひしさもいふるかくるる
源月させまい言はるんとそひつく思ひの用ふる伝でほしふる
例のまざ〳〵ひしれまさ〳〵はしめ
火おこしあるは火をけまいらと中仙言の思い中ねのさきあど
おまへちろはは物語さこ由独ねつる由ふりもさひしうつる夜のさは
ふる

にたるよ方



宰相中ねいまけ方しそをとるく
まそで移るけるを尼こしろねい
ますはをとりる糸り移まじ
秀枝中仙云たは大弁おどさ〳〵ぬ
とゞざるひして〳〵六条流へおいす
てえんあるしそうれ世也
賭射をてろち方のたねれ里亭ニテ還餐と云るをりし
ム時乞書太大臣たたねるそ六条流ニこれをりふ
まけるこの人ハ必早おする例し蓋宰れ中ねいまけ方し

つまりふけの言葉と云伝ヘ（ほのし）つけ申候

（三月廿日の夕時の事と云伝ヘ）いそのかりはこちすると

ちくさくのさひしさもつふるとおくうの

源氏世ハ言葉なんと云ひつ思ひの日ふる伝ヘ

例のまさごのこひしきうらはてつ悲しし

（紫上の女房）

火おこしあるこは大をけまいらせ中納言の君中ねのさこあど

おまへちくは相伝ふこ日独ねつ（ひとり）（ほのし）（ん）

うるる

賭射　還饗

のりゆきれ之りあるこのまつけ六条院すいとんこうちをめて（さうし）

ミこをもおいしきせんのたくろづくひしまり

おとるふおいするハこれさふこひ結こ白ハつもるく

けくくさうげよおいしますゆもこの名ハ白ハ高ハげよいとそ

くれてこうるこえなふ口のこひたちの家と尹ゆる天ひなく

れそこるこまやけそひこうるこをこまり例のたあるこちは

ぬ例ハりハくこそくて大ねまそ（メテリし）（白）ハ名ハ高ひこちの家后（ささい）

（ハ石中宮腹中勢高し）の五つらやとひとりくるるまきのセまりてきそ結よ

（薫）

宰相中ねハまけ方こそをとるくまうで結よ

ますハをくりよ糸り結まこやと車こをこうこうめさ（セて）ほこの君道の男つ

無礼中納言ハ大弁ハどさくぬこを（こしかし）

とハざるひこて六条院へおいするのやく結ふよ言ハさかり

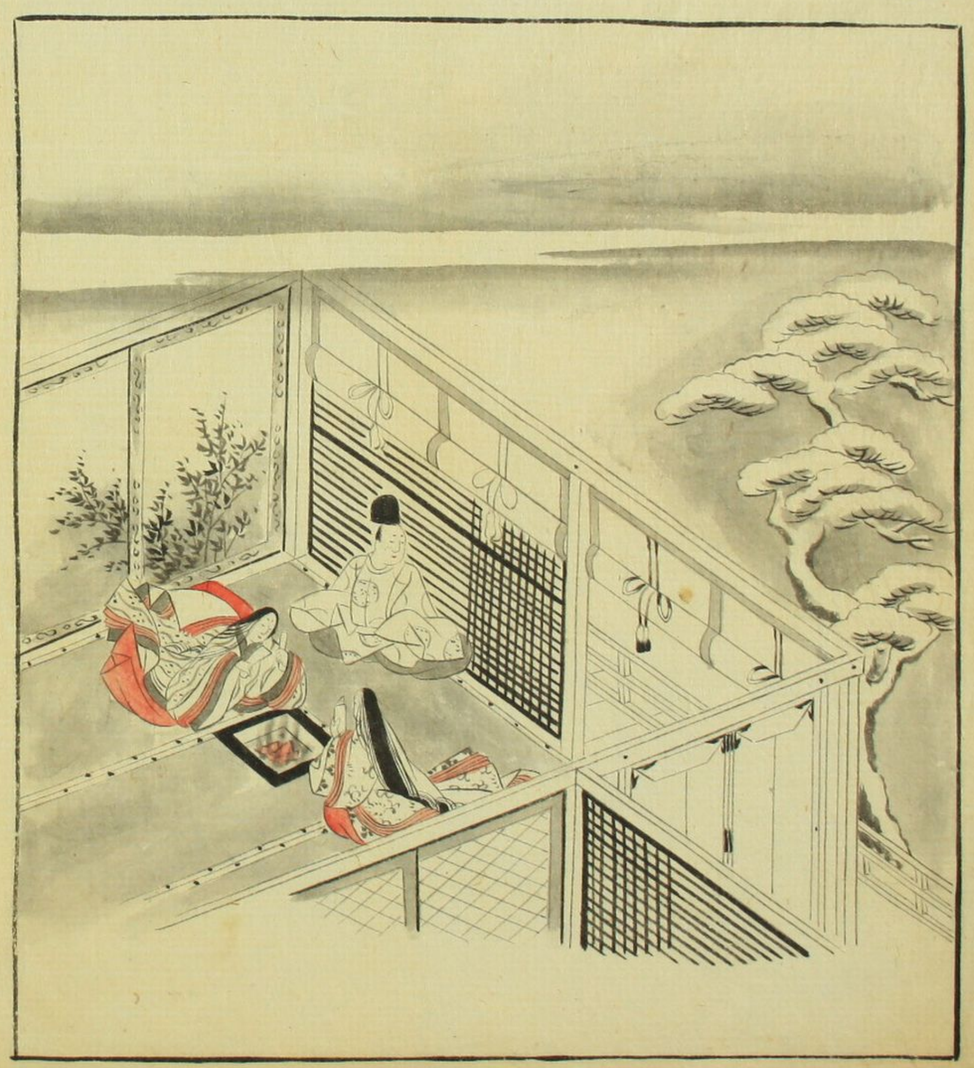
てえんるこそれ世也

賭射ハてこち方の大ねれ里亭ニテ還饗と云事を申し

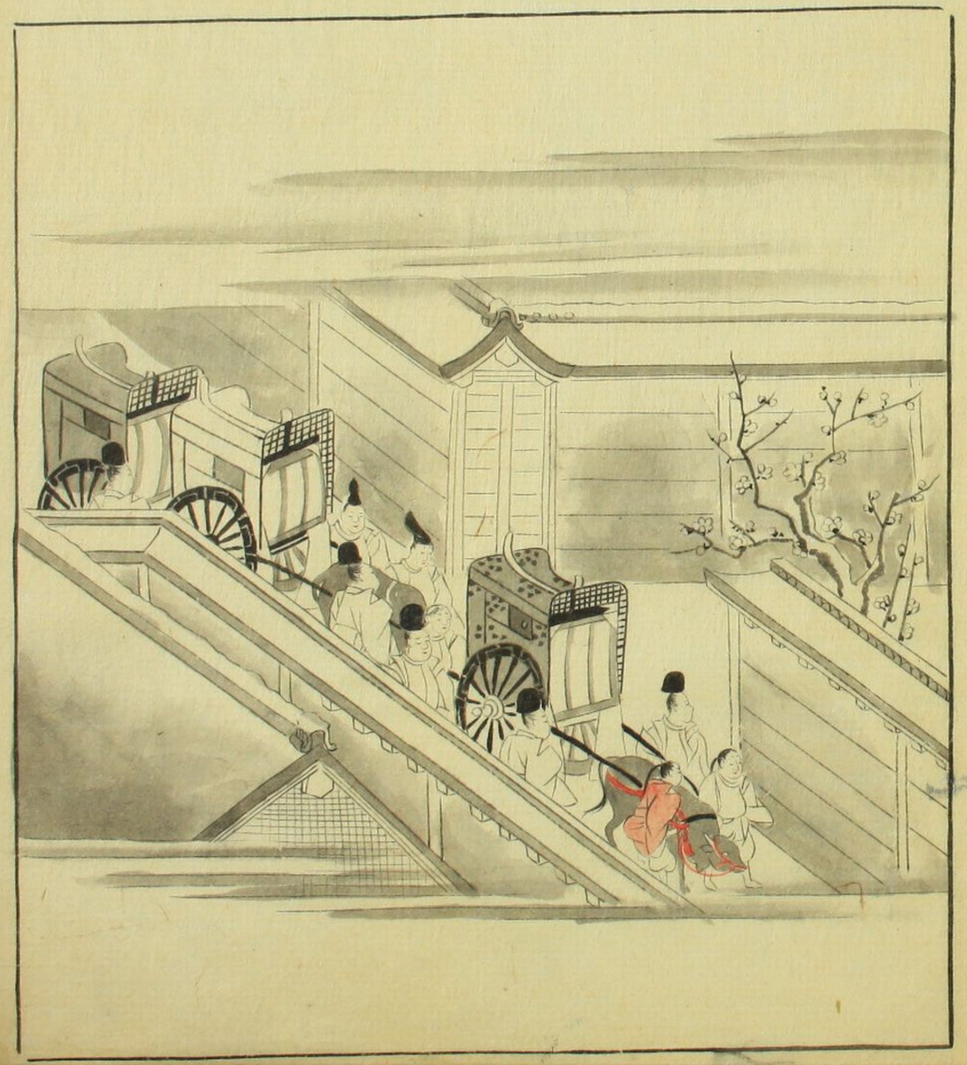
ハ時乞事ハ大臣ハ大ねこて六条院ニこれをりふ

まけくこの人ハ必早おする例し薫宰れ中ねハまけ方し

四十一
まろ〻し

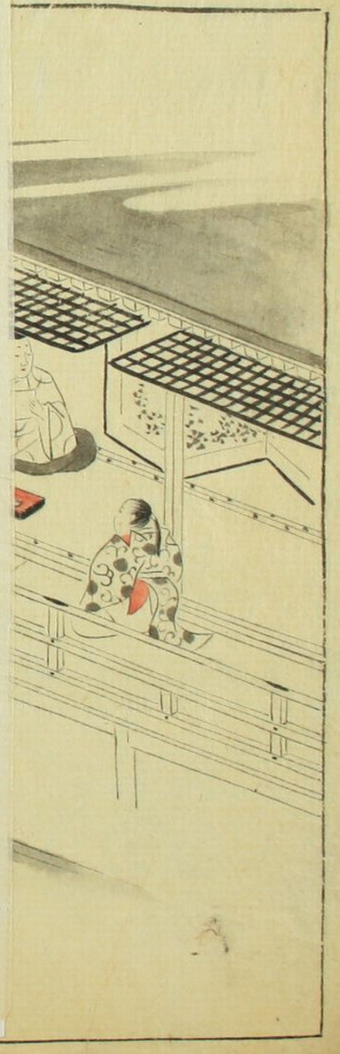


四十二
にたるよ家



かうたね

紅梅大臣より白家へ出遊ばしやありしとし
こゝよりはをうそこやるこしさをろ（さうをしをとしの紅梅大臣の用
花めそ紅君なれハあるこのつまれ紅梅いろ〳〵盤ありしとろ〳〵ぐ（さるもありしもめ乃
相りてまれうしありうつり者ハげよしそんとなれ
しらん女あどけさえもめぬれ
紅梅大臣ハ於位大臣ノ次郎なり故柏木大臣殿ノさうつぎし　按案大納言　後号紅梅大臣ト



そのころ十八九の程とまやおりくんぬるこもとりく
ふぞおりしき姫君いしあざやるよ乃ぬるいまんかしさはしめ
てげよたこんそこまるハふげあるふぞうふ橋のりそあざしぶさ
そくれのをめやうあるよ花行枝とつれてあり（むかしのはるこし美トし）くよりのはかるれ（今の女郎し）ぬ前ちく
こやらあ〳〵ぬ柴よ花のいとおりしろく咲ろうるとあのほとりのこいよ苔（こけ）

そのころ十八九の男どもやおり〳〵多くぶらつきもこころだくもとりぐ
ふぞおりしき姫君（嫡女し）いとあざやかなる名ばかりいまゑかしさはしめ
てげよたこゝろとまるハふげあるふぞらゑゆふ桜のゆそあざ山ぶき
多くれのをめやうあるよ友仕侍とつれてあり（むつかるのはるこし　蕉トし）くよりのはかるれ山前ちく（今の文部し）
こやらあく〳〵あ紫よ友のいとおもしろく咲ゆうゆうとあのほとりのふよ苔我（こけ）
むしろふく〳〵なるゆわのよりまはふハわゆ（蕉のし）（ぶくりけ　幸）ゆわじ世中ゆうぶりゆげよりとめつ
ゆるゆふ
蕉　まゆうるるのふしわゆゆ友のむまろうゆきるゆをこきゆゆ
友仕侍
紫のいろハかゆゆど友の花ゆこゆろよえゆてそきゆをさりをれ
以本文の品も書

ぶゆうのねゆゆゆこゆゆゆゆりよりゆりゆゆゆごの名ゆそゆゆゆれよりゆゆとや
ゆそおゆれゆゆゆゆさゆきゆてつゆ井ゆ
る下略　昔ゆりゆゆそれゆゆふゆゆゆをゆ（姫君達の）（碁　賭）おゆゆゆゆゆゆゆこゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆちゆゆん方よ花をゆゆゆそんとたゆゆれゆハしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

そのころ十八九の男どもやおりて
ふぞおりて姫君（嫡女し）いとあざやかなる
てげなたくみそなふげなる
あとのおりまあひくるあひのあつらう程なるさまなりすそま
であいざやうのこの男ども
ちらうこころをげうさけさくそひ
ぐしいろまく柳のいとのやうなる
つしうとこしるさはしてをりくるんふうきけいまさりのあれどみそ
ひやうるるをひいこるのしてひとあるを碁うちはとてさし
むのひ碁（見物）をうんざしぬぐしのうまうふさはどもいとしこれあり
こくんでしはとそちうさふうひはるのあるえたちさしのそきそ
ぶぐうのねがへこるあくはるまるはごのくんそゆうされまるとや
とそおとれうちうさまそつわ
る下略　昔うあるそひあふさうぶ
うちはうん方まをうもそんとた
ればそちうてうちそはこもきあげてくうれいどこわんど
字の下略　姉姫君まけ方
ケンソ見ぬし　友仕侍、姫君の男し見物し批判あるを云しや
むうくの姫君達し　クち方のわ（童女）へ（なり）て花の下まありこそちうこうをいと
おかくひろいてはいまり（暗）ゑ平文し

碁（賭）おまくるくんこうこうあるを
（姫君達の）
けあふくこうくんまるひとう
（三番三番うちうし）
（侍従し）侍従のさ
（侍従のえし中お弁のえし二人し）
ぶるあるえたちさしのそきそ

四十三
かうたね

四十四
竹川

あるさまかくふべうめかるといがいの声をとこゝをあけてうゝ（蓋げて）
へて月おかしさ（姫君達のおかしがるこゝろ）ぐるさりてうれるをあげあてそぐれとそこに
みじうくまさあげうく人ゝゐるりをのこゝとさむけよ才日そく
ゐ（なめらかなる）ひとりおかしさ海あるねとれあどわるうちなる
人（たゝ君）ひとりいそらをこゝねうくれて琵琶（撥）をまくをさてだち
伐てきぐりふしたくねるうよ雪がくれうをつる月のうはふいと
ゆうくさしおそれば扇（人君の詞）なりてこれしても月はまるうつべりきり（撥を云し）
そさしのそさるる月いみしらうらうげよ白ひやるるべし
そひふしうる人いものうゐはるふきうるくゝりを月をそだち（中君の詞し）
もをそれさ海ふをそをそひ給はんれをそうちうるひうけ
まひ今をこゝをりうよりゝづきうりをそをそこれを月
うそるるくあのハ行ゝそるるをこゝをうちとけの給
大君中君二人ハ八宮ノ姫君ゝハ玄宇治ゝおはしまさの阿闍梨（姫姫おはしまさの大君ト中君ト妹）
ものをようりうひをそ七日の間ゝ仏ゐをひひるふ巻を申り
巻中おるる的の月（下旬の比なる）おるくさゝ出る日とよ八の宮の住家
宇治の宮へ参りゐふ姫君達の琴の音をすてとものおんを聞そ給（聞給）
まひんのゐし
七月下旬の月よいうぐ心ゆるぐ
撥まそ月招りゐ給くあれなるタエカナラス魚陽ハ以戈迴落日コトヤリ
琵琶の法月ま撥ハねさゐりのなれいうくいへり琵琶の撥を指さる
あるをそ法月とゝふ霞手のようまあり

をれとさうのとをぞこゝろよもいれをおりくうるあるを給
うゝ雪に真あるをりなるゝ姫しくゝんいとおかしく面白しとりうさ人ゝを
うゝうり

ちりの本　七年ゝ月ゝうゝうしうゝん

椎の本

葦中ゐの白雁と宇治川を琴ひき笛を吹て後川むかひなれ
舟こそ白雁のゐてゐたりあり　八宮の住給ひ
て八宮の御住ひ給ふ宇治川の辺八人の橋寺のまろうどを云るし
さ海とよ山里ひくらるあ
そこそこあるはもつくしをさ都ひくるやうもあるこちしてうさたらひをいとう
もれ　なりいはしくのわるいとしのあるこ引あをわづまま
うきるやうはあるでつきの所のひさ生ひ一筋でうのこころ
よ探くあそび所ありしの文の所琴をうるついでふしくこそひ
なつれどさうのしをそこころよもいれとおりくうるあるを物
うくなれぬけよやあらんいとあ所ひくあ白しけうさくこそひ
ううり

椎の本

四十六の巻　うろうろうろうろ

是より宮仕まつる

六条院（神の月）なかばより三の町はかきあつめてまづむまごの君よりたちのつきのはむまひさのの列し

あるべきかたのをしこうちをひきるさほう

のきちまあやをんとうれそくるひらひつぐるほどる

れこれちんぜんようりおいしますみちの程そそとそそまるる屏風

よハかりき紙をうきわくハかりをさをおよそ軟障せ絵とせる幕あとの

うるわしこれはさきをつりひりの池よ舟どもうけてみづーこころの漕

ひのおさ境の移ひとめーぐーく移とねろさせたまりちいさ

さられもひらりつざとのはるるの国まず移何をかれとしるる場数り寝殿を移りすささせ移こ

ちのけりてりにあん

禁中のミつ石のうひよ六条院の移何を双へて使ゆるるし

内厨子石ハ主上れ内膳をつるこるるおしそれまそれられる移何あるに

内厨子所別當一人膳ア預瀧口七人移何四人何代等の類ヲ

此年又後ノ裏葉ニ

四十五

是ヨリ宮居ニ

四十六

椎の本

但し此巻ハ此本ふる
反のうゝ系ハ此ものゝ

此図ヲ此三枚目ニ粘スヘシ藤ノ裏葉ノ巻、山ノ帝
冷泉院 六条ノ院ヘ行幸ノ時ノ支ヶリ此所ヘハ
第弐ノ図ヲ粘スヘキカ可考

四十五

[illegible]姫

是より宮居さてふ

四十六

椎の本

但し此巻ふ此本ふ見
及のうゝ[illegible]此すゝ

大君の召し女房達　是てし

ひろり見へつる方てさうじ　そ　り　の　す　ま　ま　し　し　大君と

十月一日ころあづろとおりさわぐ　白を蓋のし　とそゞのろ　さこ　の

紅葉はいろ〳〵もべうの物をもさきそめ　ゑんべも取こゝのむつまし　おろを

うぐりいと思ひ　中君へ書れ　ん　あ　れ　ば　し　思ひてとおぼせど　おせさ　ぬ　ほ　ひ　を　ま　ば　れ　い　と　の　ば　る　し

ひろぐりて　略　宮は宮ハもゝ調て給ふ　ん　ま　る　ゝ　白の宮のさ　る　し　て　の　ま　り　く　ぐ　り　こ　ざ　え　ん　ぐ　り

面白くあそび給ふ　白宮に　人〳〵　白宮に　白宮の御座舟し　白宮の御座舟し　る　根　を　ま　る　と　そ　る　ま　よ　え　を　そ　て　わ　ら　き

る舟のぐりれ　さと見ゆ　る　よ　う　え　ぐ　ふ　き　を　る　も　の　く　ね　ど　る

風ふつて　おとろ〳〵　ち　さ　ま　て　ま　ば　ゆ　略

七十二代白河院義保年中大井川ノ行幸ニ舟ヲ紅葉ニテ餝ル　此例ヲヒケリ

山圖七ヨロシ

さゝ〳〵ひ

河内梨ヨリ中ノ君へまらる　蔵　土筆

ま　ひ　ち　く　し　おりしさこ　澁　ま　よ　い　れ　そ　こ　れ　い　ま　ま　ハ　べ　の　く　や　う

だて　作る　ゝ　おかそ　ま　れ　り　て　紙　い　ま　て　ハ　い　と　あ　し　て　ま　い　わ　ぎ　と　が　ま

しくひさゝあらてそ　さ　る　君　ま　ま　あ　ま　ま　こ　の　ま　を　つ　ま　く　ハ

所前よ　ま　ま　ま　さ　し　ま　ま　と　あ　り　て　ま　ま　を　ま　ま　れ　ぬ　ま　ま　ひ　あ　り

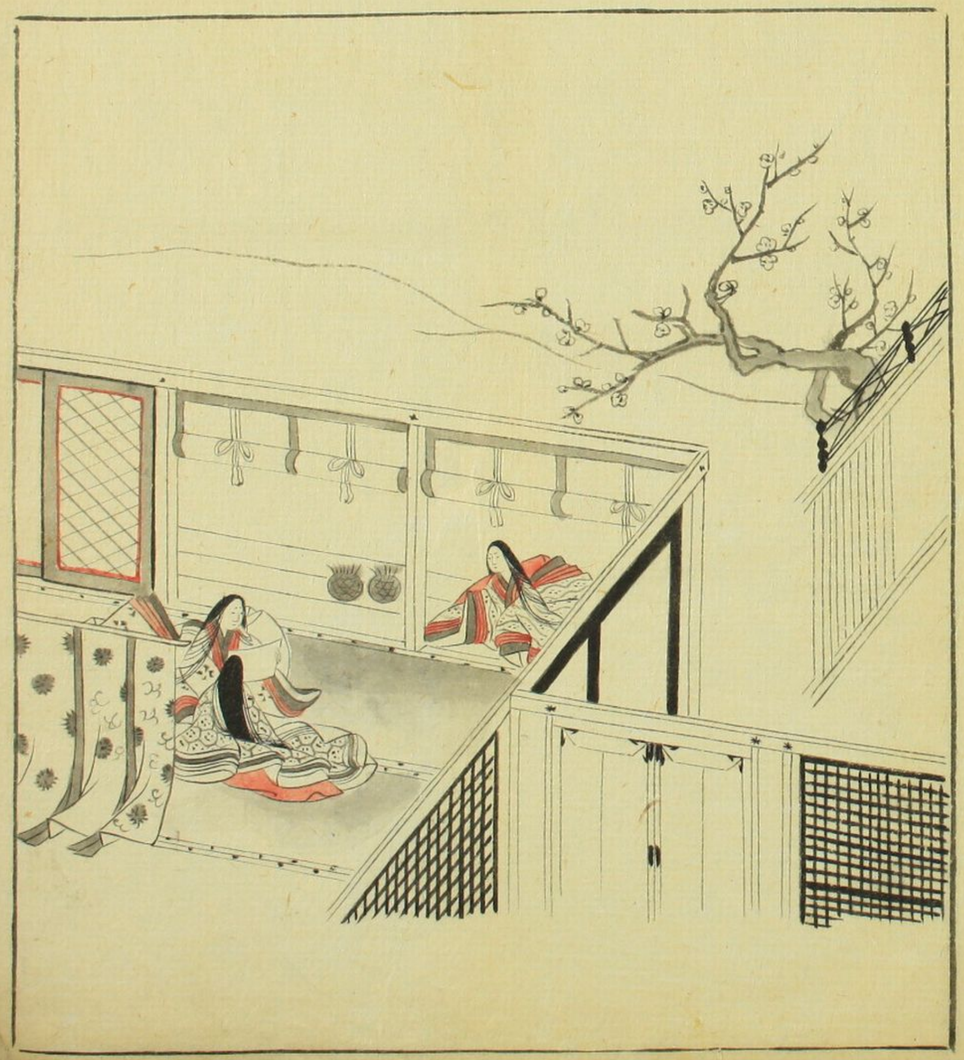
白宮ゝ　人の　ま　ま　ま

大君の召し女房達　是てし

ひろり見くつる方れさうじをあけなて京のあそれなるを大君と
蟻とし見給へ女をもこしつるり色給へるまゆのさきのちりさるれば
見ぶのつ申もやうく考りえくもてり所ろこるいとえんなるさ海ろち
ばを蟻の通しとハのくてくろろよ月を花をもおぶんまもてあそび
そろ有き世のみ給をさこへあいせてあんをぐさ海そしさといとあろ
しささまもしてろひさこ（身ばやうくおそろしさもあぐさこて
蟻の通のやうに直面はあくでとど
いとふしくありてでおへぐてしあるとすへいまとよんの（ぐていさこる
あるまくあんといくく給蟻の通りれをけり
おれちろさこ申ふこさあくくの経乃果てい申ぐまる
とこそぐろくき代といとりあろそ所りげるおぐしころ蟻の通しあり
ぐわる羽蟻をえろ行まくこ人ハいろぐをろそりすゆ（こ下略

小圖も写し

さそらひ

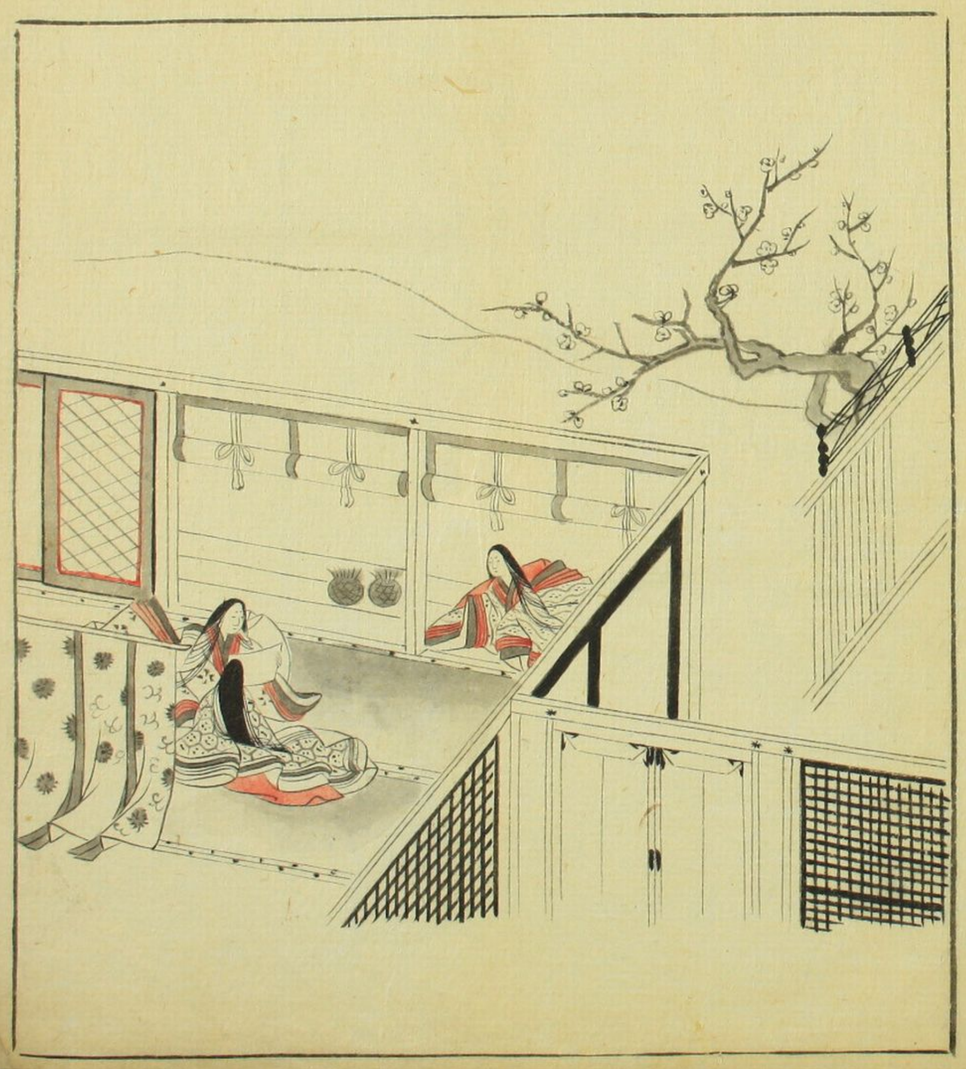


大臣の子し女房達　退てし

四月人さしそそさつてこれらうらふして仏のほとそしゝ
とうてゞる人をあり　略　屏風をやをゝをあてへめいと遠のゝく
むくつけうてならばうりうりうまつるよ　もきとぐめぐれていこ
じゝわさうこころうけれバへごてあきとけりふをやうふん
めてゝうあるわぐうれてあばめまくるさ法のいゝゝおうゝくれい　下略

大臣ハ泣をを差しなくり　課

さそらひ



四十七
あをはう

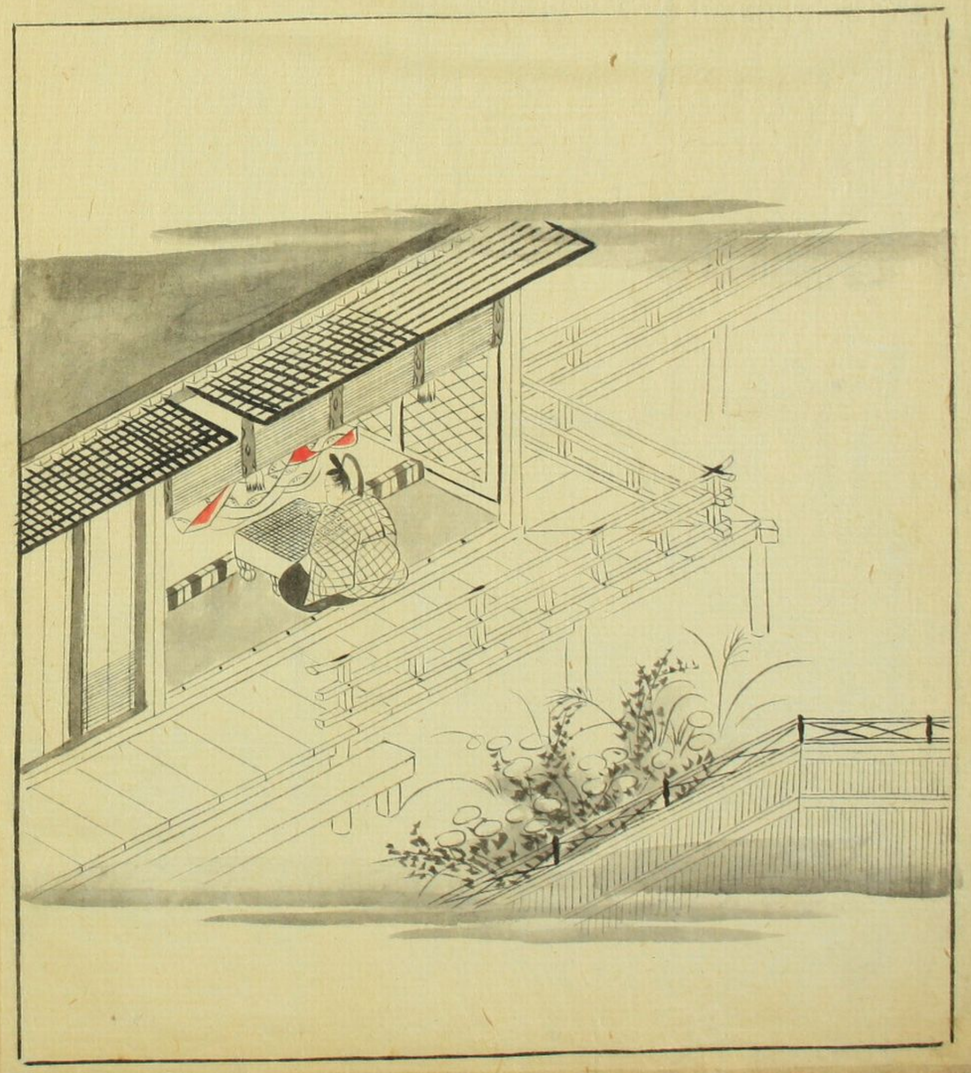
右秋ノ所ヨリ柳モ秋ノ柳ニ画ノヘキニ

四十八
さくらひ

四十七
あをはう

四十八
さくらひ

それもまゝとぐれおりてさほどの花の菊を殿ばら
けうしんじて人めしてさいまの殿上人
中務の宮の御子上
中づかさ
上の御子
蕚しみつす
中納言
とそうをを中納言のあそんしのいとおもをじありて
伝て
蕚のめしなり
ばよくとりわさてめしをもひありてとをくうれる白ひら
をめ人ゝとすさまし
勅語
のをくれつるりとよのと
うの多我あそびのすさまじうさくゝいとつもぐなるとゝ
づまをくるこゝろまてもこれをんまうるべきとて蕚ぐん
めしいでゝ
花
のうくさにめしるを
いつをりやうけづうくあり
まをを
蕚のこゝろのをとをふとを
勅語
のりあ
をあるひまゝれバ
蕚
のりあ
をあるすきまこさ
勅語
をかはるで
ありぬゝれどうくをくはえるを
何と賭
ま
絵
の
殿
の
殿
ゝ
のををするゝ
ゝ
ゝ



葦ハ浮舟のおりまする三条の小家なり 日車にて宇治へ浮舟を移ふこと

葦寺

さてもとりむくやとけさあつまやのいのりほとふるあそこそ

と葦の袖のとひしめるをもふつてうをなるまであつまのさふらひも

ねしろさぬべしとのたまふ

ミるこのひさうよおもしひさつくろ

浮舟を葦のうへ

しあるをこれのもとそうりて

あけたれば 略 只道生宿よりあるる式じあ

おりまもなりあるあ人を門あけて

ぬれば入てやをもむし

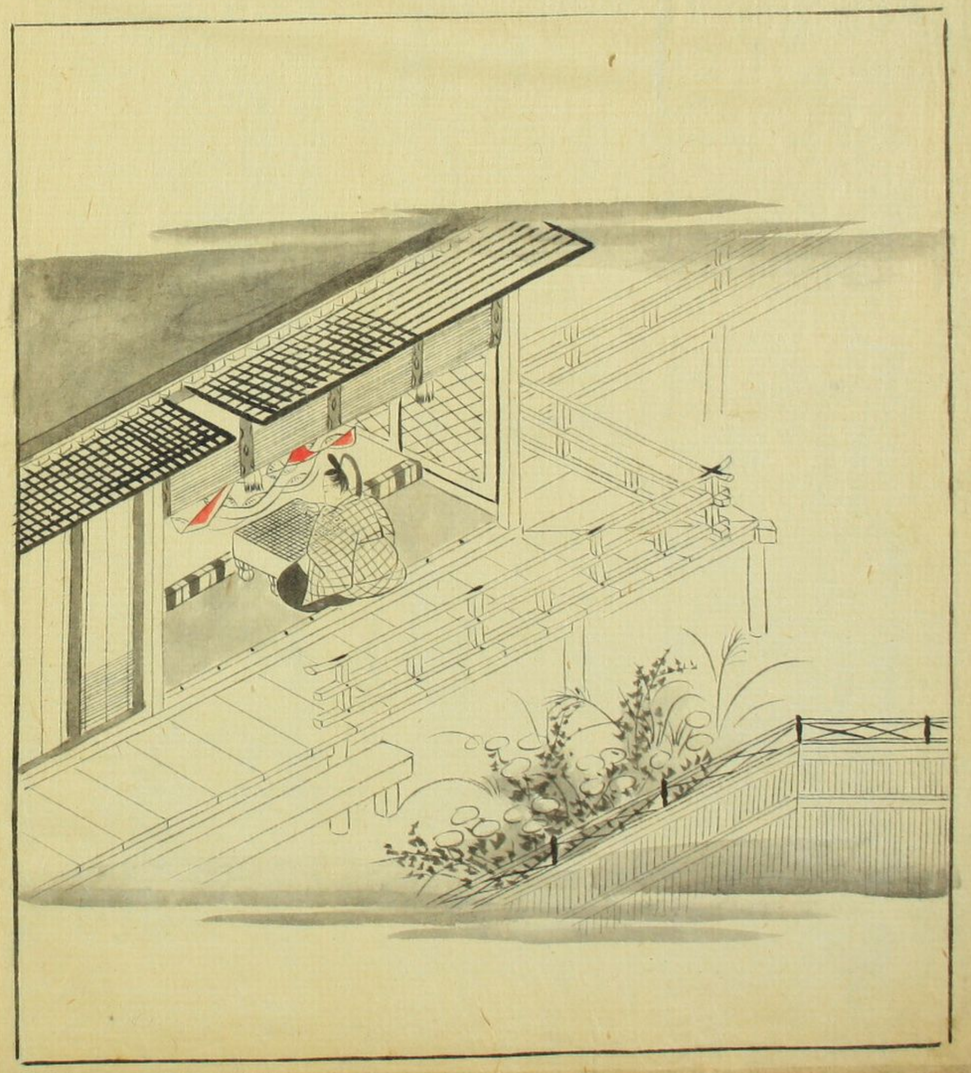
車よりのるし

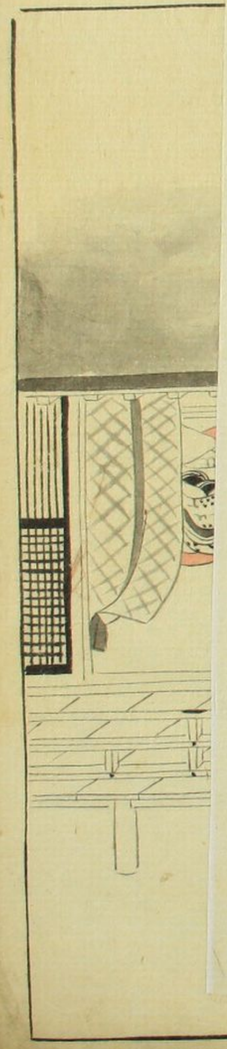
いぶさそのせのりられもあやし

浮舟と

ひるもみるあるこ

下略





浮舟の尼し
年ごろいとたちふのこゝろ
さむこゝろ
ゆくへをなんとばかりいと
ものびうしろめたくそふ
ものさびしうてあはれなり
ぬ
浮舟し
浮舟のさうし
絵ものがたり
なぐさ
ものとて
ものをとりあつめて
ものがたりの
ものをとりあつめて
ものがたりの
ものをとりあつめて
ものがたりの

四十九
やどり本

五十
東屋

白玉宮殿よりはりまぜて浮舟よりひろひ給ふてく　浮舟もふ美のゑし
白とうしのしたえまつる

白玉宮殿へ海りはひ来ふけて来りあり
宮殿へ入り給
いつ方へおとをとをるもいとをもあへ白をす
白の浮舟をし　浮舟の後よ
うきしづくさてもぬれ山ハこのうちろうろうまとまりて仕度をそしそま
つるいとをるげなるものとあけられミいぐるもちいさき舟よのりのて
さしわるり給ふ　浮舟ふし　浮舟のさあし　浮舟ふし
ぶそくおりてつとつさて　いぶられるもいとらしうとおぶを方の
の月すミのぶとあれ　ぬるもくるりあるさまされあんこちをれの
小海とりて舟乙ハ　さうとぐめしるをとりてくまへバ　ぬるさやるる
橘の木のさまし　ぬゆがとぬるりしる花し　白の浮への河し
君のさ海ハてざれるとをを木のうげちくまりられミあへいとをれ
クれど千年もふべきみどりのふるをとをのあふて
白
やしふともうをんものうちを花の小海のさきよちぐるこころハ
女もめつしうをんこちろやうよぬるえて
浮
うちをれのこしはをいろもうしとこれうさ舟をゆうを侍ぬ
うのさしよさしつさぬりはふ　けたかうをる　の家のうをるをしし
則附方のおぢ因幡守ゞ家あり

ぬ字ふるもあくりん寄うを花をうをを

大君と浮舟と
あやしつうをうをちぐりをつくしをつぐけ
あるうん殿夕暮うげろふのねをうをれげよとびちぐふを
薫つりとををふをとをれを見れハ又り和もをうを侍をし
あるうあさうのし例のひやりしちぬをうを
うげろ

白玉宮はまりめ　そ　浮舟は　ゑひ　ひ　ひ　ふ　て　く　浮舟も　ふ　ま　の　ま　し

白とくひのしるしとえまつ
女はまるこ　ち　ま　ま　と　い　と　さ　ま　け　よ　又　う　る　く　あ　く　ん　や　と　こ　し　ん　ど　こ　ま

匂ひし
や　る　白　ひ　さ　ま　た　る　と　い　こ　う　の　く　お　そ　く　ま　り　と　こ　う　す　ぐ　と　ひ　き

匂ひし
う　も　そ　も　ま　の　く　ひ　の　と　し　ま　い　と　お　う　く　け　ま　り　よ　う　さ　す　さ　ひ　ま　あ　て　り　ん　ど　ま

浮舟し
お　ま　の　く　う　さ　ま　の　れ　は　ま　う　う　さ　こ　ち　ま　は　お　ま　ひ　も　う　つ　ま　ぬ　べ　し　ん　ま　り

匂ひし
ん　よ　は　ま　ま　う　ま　ん　と　ま　ま　ま　あ　さ　や　う　の　ぬ　ま　ど　い　と　し　し　て　い　ま　お　う　し　け　な　る　男　女

ま　う　ま　ま　ふ　そ　ひ　ふ　し　し　る　う　ま　ま　ま　さ　て　つ　ま　よ　う　く　て　あ　ま　ま　や

ま　の　の　ま　も　ま　お　ち　ぬ

白玉
あ　ま　ま　世　を　ま　め　て　も　行　う　の　し　き　い　ま　ま　あ　ま　ま　命　ま　り　ま　り

浮舟
こ　ま　ま　と　ば　な　け　ま　ま　ま　し　命　の　ま　ま　ま　め　あ　ま　世　を　な　も　は　ま　し　う　ば

白　ま　ま　ま　ひ　ま　人　ま　ま　お　ま　れ　て　い　命　ん　も　う　し　ま　ふ　ま

浮　ま　ま　ま　ま　ひ　入　し　を　後　悔　の　ん　あ　ま　り

五十二
かけ橋

宇治し　宇治ゆきて浮舟のひし　和の字し

昔の山里ゆきのとともるごやくゆ
ゆかれ　未ぐちおとろく前栽ゆ
ゆり秋よりゆけば草のくさも衰ゆ
とて　ふつけるものを　ゆ　ひつ
うじあり　浮舟の君

白雲のゆきとよ　ゆ
ミゆりふ　ゆ　ゆ
ゆもゆひ　ゆ

ゆ　ゆ　ゆ

小野よりいとふくとゆりしるまち葉の山もむらひてまさきくとゆ
やまあの風ふぶりと昔見ゆるゆ
のゆりゆくやゆ谷の彩ゆ　ゆ
風ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
もゆに　ゆ　ゆ　ゆ
ゆそゆれ

荒の叡山より下山ノ行粧ゆ

宇治と宇治川と浮舟のこと　和の字なし

昔の山里ゝハ名のみとゝもあるごやくのり門ゝさ波ゆゑ悲哭こゝとゝ野の秋し
おもかけ未ぐちおとゝろく前栽あぐ
なり秋よりゆけバ雁のゝくさも衰あるを門田のいゐ
とゝおふつけるものすゆびしつくわゝさ如月ハ雨うゝひけ
うゝあくりひゝ浮舟のこゝあゝとゝもおゝくゝしつゝなぢあゝ
のゝとなゝも忘られて下略　あ我あさまゝ
知ゝ
歎ゝと我あゝゝ口おゝしゝれバ
浮舟の君のこゝとゝゝ
月をあけゝ涙のこれをやう涙とゝ
ゝゝゝゝみけてゝれゝとゝめゝ

ゆゑ九字脱

山所人物何モリギ尼姿然ヘキカ

小野と宇治あゝ
ゝゝゝ尼君おとゝかゝるゝト山ゝり粧を
ゝ法ゝ衣の半もゝゝるに
ゝりさゝ心ゝたにひゝくゝとゝゝゝゝゝ谷ゝこさ
のれとゝゝゝゝひゝりをゝゝとゝ尼君ゝゝもゝ
にゝゝゝゝ夏ゝ比青ゝ山ナトゝゝゝり

五十三
[illegible]

五十四
[illegible]